

Title	「鎌倉名所記」諸版について
Sub Title	
Author	白石, 克(Shiraishi, Tsutomu)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1977
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.14 (1977.) ,p.307- 343
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	森武之助先生退職記念論集
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000014-0307

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

*注記・・・論文中の写真について転載する場合は斯道文庫にお問い合わせ下さい。

「鎌倉名所記」諸版について

白 石 克

江戸期に成立した鎌倉の地誌・紀行類は非常に多い。刊本では「鎌倉物語 五巻」「新編鎌倉志 八巻」の二書が、その代表として特に知られ、この両書の記述は現在の地誌・案内書に致る迄、数多く引用され続けている。後者の「新編鎌倉志」は名所・旧跡の綿密な記載と豊富な引用文献を所収しているもので、現在の地誌類をも含めて、鎌倉の姿を記述する最もまとまった著作といっても過言ではない。更にこの二書の他に、当時鎌倉に来た旅行者達が携帯して利用したものとして、本論の「鎌倉名所記」がある。同書は度々刊行され、私の調査したもののだけでも、二十三版二十七種の諸本のあることがわかる。いずれも表紙共六丁から八丁ほどの仮綴小冊子で、調査図書中、最も年記の古いものは正徳三年刊本、時代の降るものは明治六年刊同二十三年修印本である。各版共にコンパクトな解説があり、まことに当を得た記述が多い。当論では始めに同書に先行した「鎌倉物語」「新編鎌倉志」の各種版本の比較をして、次

いで本論たる「鎌倉名所記」諸版本の相互関係を述べていきたい。その代表的刊本として、三種の諸本(後述)の内、特色ある刊本たる(一)(四)(七)には全文を翻刻し、解説していきたい。又、「鎌倉名所記」に先行する二書については、各種の解説書があるので、本論では内容の問題については省略して各種刊本の関係のみに重点をしばった。「鎌倉物語」「新編鎌倉志」が机上に置く参考書であるならば、「鎌倉名所記」は実際の名所めぐりに携帯するガイドブックで、前掲両書から派生してでき上ったようにも思われる。「鎌倉物語」と、ほぼ同時期に刊行された「沢庵和尚鎌倉記(江戸前期刊本。万治二年の刊記があるものがあるが、その年記の部分は印面より見て、うめ木による修正に思われるので、以前の刊行であろう)」は地誌類とは異り、紀行文体であるので、どこまで当時の実体を記述したものが若干疑問が残る。ある程度は江戸初期の荒廃した鎌倉の姿を示しているであろう。

一、鎌倉物語 五卷 中川喜雲著

(一) 万治二年刊本

万治二年に美濃判五冊本(每半葉十一行)ができる。その内、内閣文庫本(一七三―一八九)・金沢文庫本・無窮会神習文庫本及び「近世文学資料類從」所収本を比較することができた。四部共、同版で刊記は「萬治二年^巳七月吉日/洛陽寺町誓願寺前/安田十兵衛開版」。しかしながら、この刊記部分の野の形より見て、年記の一行を除き、書肆名の二行はうめ木による修正と思われる。この四部より早印本では、別の書肆名が記されているのであろうか。この版木は後に江戸須原屋茂兵衛に移り、右の刊記三行はけずりとられ、その部分には新たに「元禄十三歳^{庚辰}二月吉日/日本橋南一丁目^{須原屋茂兵衛板}」が、うめ木により刻された五冊本が印刷された。この元禄印本は内閣文庫、東洋文庫、静嘉堂文庫、神奈川県立郷土資料館の各所蔵本を調査したが、いずれも本文は早印本と異りがなく、補刻箇所は見当らない。刊記のみを直した^{だけ}で印刷したのであろう。

(二) 享保二十年刊本

その後、右本の版木は痛んで使用できなくなったものか、同書に較べて携帯に便利な小型の美濃判半裁・十二行本が刊行された。当書は万治二年刊本と内容は同一であるが、全く別版である。画は全て新しく作り直され、同書の序文末にあった「中川氏喜雲」という署名が失くなっている。静嘉堂文庫所蔵(七七―三四)三冊本は巻末に刊記「享保乙卯冬改正

江戸日本橋 小川彦九郎板」があるが、書肆名の部分の野に修正の跡が見られるので、すでにこの刊記にはうめ木による修正がなされているのであろう。次いで、無窮会神習文庫所蔵一冊本は、右の

静嘉堂本より若干後印である。巻末刊記の内、書肆名部分のみが、うめ木により修正がなされ、「享保乙卯冬改正^{江戸日本橋 松葉軒}

萬屋清兵衛」。すなわち、版木が小川彦九郎より萬屋清兵衛

に移ったのであろう。又当書には見返し刻記「榎嶋 鎌倉

金沢/右三邑神社仏閣名所古跡故事来歴等^{旧記所載考正之輯録而号鎌倉物語云々} /鎌倉名勝誌/東武 書

林 松葉軒」がある。享保二十年の刊記の内、両書の書肆名

の銘記は共にうめ木による修正であるので、両者より早印本

では別の刊記があるかとも思われる。

その後、更にこの版木は江戸須原屋茂兵衛に移り、本文の

版木はそのまゝにして、右の享保二十年の刊記のみがけずり

とられ、新たに「宝暦二申十二月求板/江戸日本橋^{須原屋板行}」が、

うめ木により加えられ、印刷された。この須原屋求板本(題

簽は「鎌倉名勝記」)では神奈川県立郷土資料館三部、金沢

文庫二部、東京都立中央図書館二部、国立国会図書館二部、

無窮会神習文庫一部を調査した。神奈川県立郷土資料館所蔵

本の一部(K二九一、四一五一a)の刊記次丁には須原屋茂

兵衛の薬品広告二丁が付されている。万治二年刊本(一)は「近

世文学資料類從(古版地誌編 十二)」に影印と森川昭氏の

詳細な解題が述べられているので、本論では重複を避け、私

の調査した各刊本の比較のみを記した。

二、新編鎌倉志 八卷 河井恒久纂述 松村清之校 力石忠一

参補 貞享二刊 美濃判

「鎌倉名所記」はかなり、当書を参考にして編纂されている。当書は早印本・後印本共に、年記のある刊記がないが、貞享二年の京都茨城多左衛門（柳枝軒）の跋文があるので、通常貞享二年刊本といわれている。江戸末・明治初期に到り、印面に磨滅の跡が見られる迄、同一版木を使用して度々印刷されていたので、現存するものが非常に多い。内閣文庫（八部）、静嘉堂文庫（三部）、国立国会図書館（二部）、慶應義塾図書館（一部）、東京都立中央図書館（二部）、金沢文庫（一部）、鎌倉市立中央図書館（二部）の各所蔵本を調査した結果、いずれも印刷の時期は異なるものゝ、全て同版で後印本にも補刻がなされていないことがわかった。只し、国会図書館本（一一八―七一・十二冊本）及び金沢文庫本の巻末には、柳枝軒蔵板「彰考館訂本刊行目録（正徳三年四月吉日）」一丁が付されているので、同書は正徳三年以降の印刷であることがわかる。当書の早印本には全て見返し刻記「新編鎌倉志／洛陽書肆柳枝軒蔵版」が茶刷であるのに比し、印面に磨滅の跡が見られる後印本では同版ではあるものゝ墨刷になっている。この国会図書館本は墨刷で、「方淑」の印記の下方が欠けている。私の調査した諸本の内、墨刷では最も早印にみえる。よって見返しは墨刷のものには正徳三年の目録が付された後に印刷されたのではないかと思われる。分冊について、より後印になると十冊或いは八冊本になる。原装を保っていると思われる早印本は十二冊本で、巻二・巻三は

二冊に分冊されている。巻三が第三十九丁より分冊されるものと第四十六丁より分冊されるものとの二種があるが、これはその凶書の刷次による違いか、その後の補修の際の調整によるものか、今のところわからない。江戸末期以降の後印本には鎌倉市立中央図書館所蔵八冊本（K二九一―一八）と慶應義塾図書館所蔵八冊本（一一五―一六）がある。前者の題箋は全冊同版で巻次は刻さない。又、前述の見返し刻記がなく、奥付もないので、版木の所有者はわからない。更に当書には「凡例」全三丁及び「引用書」首一丁がない。前者より若干後印の明治初の印本と思われる慶應義塾図書館本では、版木が茨城屋から京都山田茂助に移動したので、見返し刻記は篆書にて「水戸家編纂／新篇鎌倉志／京都書林聖華房製」、奥付は「皇都寺街通六角南式部町／書林聖華房 山田茂助蔵」と換っている。題箋は前者の鎌倉市立中央図書館とは別版で、見返し刻記と同様に篆書である。前者と同様に、各冊共同版で、巻次は刻していない。更に「凡例」全三丁と「引用書」全八丁がない。後印本たるこの両書は共に「凡例」「引用書」に欠失箇所が見られる。その部分の版木が欠失したのか、或いは印面が痛んだので印刷しなかったであろう。

三、「鎌倉名所記」

当書の収録地域は、北は山ノ内から大船或いは今泉不動、東は金沢八景、南は葉山佐賀岡世計明神、西は江の島である。これは前述「新編鎌倉志」とほぼ同一で、名所巡りの巡路も又、鶴岡八幡宮を中心に行っているだけでなく、各方面に於いてもほ

とんど同一順路をとっている。このことは同書を手本にしていることを示しているように思われる。更に第二種本の諸版には「(前略)委敷は鎌倉志に詳なり」という記載さえある。名所巡覧のコースでは、「新編鎌倉志」は八幡宮を中心に東、北、西(含江の島)、南、金沢八景という順であるが、「鎌倉名所記」の諸版又いづれも初めに八幡宮を解説し、以下同社を中心に各名所を巡行する。しかしながら、「鎌倉名所記」では、その巡路に左記の三種がある。

(一)第一種本 八幡宮を中心に東(含金沢八景)、南、西(含江の島)、北の順

(二)第二種本 八幡宮を中心に東、南、西、北、西南(含江の島)、金沢八景の順

(三)第三種本 八幡宮を中心に東、北、南、西、江の島、金沢八景の順

前述「鎌倉物語」も又、八幡宮を中心に名所を巡っている。すなわち、その巡路は左記の如く、万治二年版(内閣文庫本)の各冊題箋下方に記されている。()内にはコースを補記した。

第一冊 つるかをかよりにしきたの名所(山の内、扇ヶ谷)
第二冊 つるかをかよりにし南の名所(西行橋より長谷、江の島方面)

第三冊 つるかをかよりひかし南の名所(小町より南下して葉山三浦方面)

第四冊 つるかをかよりひかしの方の名所(金沢道を東に荏柄天神、大倉ヶ谷迄)

第五冊 つるかをかよりひかしきたの名所(第四冊に続き、東に金沢迄)

右の如く同書の巡覧の順序は「新編鎌倉志」に似ている。しかしながら、各方面の収録範囲が若干異ると共に、著者が名所を巡覧するという形式をとっているので、記述態度が異質である。この「新編鎌倉志」に於ける八幡宮を中心に巡覧する形式は「鎌倉物語」を踏襲するものかもしれない。

「鎌倉えつ入りあんないかゞみ(宝永七刊)」は「鎌倉名所記(正徳三刊)」の直前に刊行された案内書であるが、同書には地図があるだけでなく、巡路に於いても「戸塚・山の内より八幡宮」「ふじ沢・江の島より八幡宮」「八幡宮より金沢」「八幡宮より飯島」という記述の仕方であり、東方は朝比奈、南方は「三浦道寸城あと」「きしゅづか」で終わっている。又「鎌倉名跡志(天明五刊)」は鎌倉外(七切通し外)の部分を全く取り去っているが、順路は八幡宮を中心に東・南・西・北の順に巡歴し、「鎌倉名所記」第一種本のコースと同一である(同書の複製本は「鎌倉古絵図・紀行」沢寿郎等著 東京美術 昭和五十一)に所収されている)。同書は沢氏の御指摘の通り、「鎌倉名所記(富田屋版 後述(三))」を手本にしたものと思われる。

私の調査した「鎌倉名所記」の諸版の版元を、同書の刊行年代順に左記に列挙すると、

富田屋庄左衛門 二版、管吉 一版、表具屋 二版、鎌扇人

一版、英富 一版、大坂屋孫兵衛 四版、小林弥三郎 一版、
家根屋四郎右衛門 一版、丸屋富蔵 一版、常陸屋伊三郎 二
版、二之宮 二版、戸川 一版

右の版元はいずれも鎌倉の住人である。又、ほとんどは「鎌倉絵図」をも刊行している。この絵図については前掲「鎌倉古絵図・紀行（以下、当書を引用する場合、「沢氏前掲書」と略称する）」、「鎌倉の古版絵図」沢寿郎著 鎌倉市教育委員会 昭和四十（鎌倉市文化財資料 第五集）」の両著にて詳細な解説が述べられているので、できる限り重複を避け、論を進めていきたい。当名所記の版元と「鎌倉絵図」の版元は一致するものが多い。当時、両者を同時に販売していたのであろう。本来、この両者は一つにまとめて調査すべきであるが、現存するものは皆、別々に保存されてきている。従つてできる限り、両者を対照させて本論を進めたい。詳細に比較していくならば、両者の無年記のものについても、年代を推定する決め手を見いだす可能性もありうる。しかしながら、絵図では比較的年代の古いものには版元や刊行年を明記するものが多く、江戸後期末期以降るに従い、版元のみを記載して、年記を示さないものが多い。一方、名所記では天明以前の刊本がほとんど無年記であるのに較べ、以降の刊本は版元と年記の明記されているものがほとんどである。全く、この両者は対照的な形になっている。或いは江戸中期以降の絵図は名所記と一組で販売されていた為、敢えて年記を記す必要がなかったのかもしれない。文化以降の名所記の版元は、大坂屋孫兵衛 常陸屋伊三郎 小林弥三郎

家根屋四郎右衛門 丸屋富蔵 二之宮 戸川といずれも絵図の版元でもある。

前述の如く、「鎌倉名所記」は巡路の違いにより、第一、第二、第三の三種に分類することができる。しかも各種の間には、名所に若干の異同が見られる。刊行年とこの異同より考へ、第一種本より第三種本へと成立年代が降っていくことがわかる。第一種本は正徳三年刊本から始まり、江戸末期のものはなく、全六版、第二種本は天明四年刊本から寛政七年刊本迄、全三版、第三種本は寛政頃の刊本から明治六年刊同二十三年印本迄、全十四版がある。特に第三種本は十四版（文化以降がほとんど）も別版があるほどに、数多く刊行されており、同様にこの期の図柄をもつ「鎌倉絵図」も非常に多い。この第三種本は前述列举した版元の内、表具屋（第二種・三種共に刊行）・大坂屋孫兵衛以降の版元による刊行書である。これら絵図及び名所記に於ける収録地域は異なり、絵図は初期のものから、ほとんどが鎌倉の範囲にとどまるのに対して、名所記は前述の通り非常に広範囲である。

以下「鎌倉名所記」諸版を第一種本より第三種本迄、各々刊行年代順に解説していきたい。

（凡例）

。書名は外題によつた。

。各図書の本文巻首は表紙裏葉にあるので、丁数には表紙をも含めた。

。各図書の大きさは美濃判を「大」、半紙判を「半」と略記し

た。

。全文を翻字する際、変体仮名や万葉仮名は現行平仮名に改めた。

。所蔵者名は各項末（ ）内に記した。

。所蔵者の記載順は大旨、刷順にて、早印のものを前に後印のものを後に配した。

。二部以上の所蔵者については「規一」「規二」の如く、各書を別記した。

。所蔵者名は左記の如く略記した。

規 長沢規矩也氏

沢 沢寿郎氏

前 前田元重氏

金 金沢文庫

神 神奈川県立郷土資料館

諸 東京都立中央図書館諸橋文庫

加 同館加賀文庫

蜂 同館蜂屋文庫

国 国立国会図書館

静 静嘉堂文庫

鎌 鎌倉市立中央図書館

早 早稲田大学図書館

明 明治大学図書館

院 国学院大学図書館

白 白石 克

第一種本（鶴岡八幡宮を中心に東・南・西・北の順）

(一) 改正鎌倉名所記 正徳三（一七一三）刊 半 六丁

印面高さ二一・五糎。毎半葉十三行。

調査した諸版の内、最古の「鎌倉名所記」である。書名に、「改正」の角書きが付くので以前にも同書はあるのではないかと思われるが、所在を聞かない。前述の「鎌倉えつ入りあんないかどみ（宝永七刊）」の改正とも思われるが、内容及び構成が異なるので別であろう。「鎌倉名所記」の外題で鎌倉の来歴を述べ、次いで鶴岡八幡宮、同社を中心に名所旧跡の巡覧をするという構成は当書以後明治初期に至る迄、次々に刊行される諸本に踏襲されていく。当書と後述(三)以降の諸版との巡路等に於ける違いを左に記すと、

。(三)以降の諸版が荏柄天神から二階堂方面に進むのに較べ、当書と次掲書(二)はそこから道を南にとり、歌の橋を渡り滑川南岸に行き、その後北岸の覚園寺・杉本寺に向っている。

。(三)以降の諸版が小町大路を光明寺・小坪切通し迄南下し、以後名越安養院にもどり、名越切通しを越え逗子に行くのに較べ、当書及び(二)は名越道を安養院・長勝寺・日蓮乞水・切通し迄進み、その後、小町大路にもどり南下して材木座光明寺に向かっている。

。「左まきのさどい」は(三)以降の諸版及び「新編鎌倉志」にては葉山名島の名物としているが、当書及び(二)のみ鯉と共に鎌倉由比ヶ浜の名物としている。

当書の丁付は表紙の次葉より数え、丁数をのどに刻す。巻末

刊記は「千時 正徳巳年改正者也 板元」。この「板元」の下には空白がある。当書は若干後印であるので、そこにあった版元名を版木から削除しているのである。より早印のものには版元名が刻されていたと思われるが、当書は加賀文庫以外の所蔵を聞かない。次に全文を翻字する。

「一相州かまくらのこほりはむかし大しよくわんかまたり公
いまたかまこと申せし比、かしまさんけいの／時当地ゆいのさ
とにしゆくし給ひける夜れいむの事有によつてとし比持給ふか
まを大くら山／の松か岡にうつみ給ひ此故かまくらのこほりと
申也是によつて大くら山をかまくら山と名付也／かまをうつみ
給ひし所は今のつるか岡八幡宮御本社の所也故に御本社のうし
ろの山を大／しん山ともかまくら山とも申也一ちんしゆふのし
やうくんけん伊与守源よりよし勅ちやくを承りて／おうしうあべのさ
たとうをせいはつの時からうへい六年八月石清水の若宮を当地ゆ
いの／きやうつるか岡と申所にくわんしやうし給ひ当時其きう
せきを下の若宮と申也其後陸／奥守源よしいえ永保元年二月し
ゆふくをくはへ給ふの後治承四年源頼朝／ゆいのつるか岡より
若宮を小林の今の宮地にうつし奉り給ふ此故に今此所をつるか
岡と也／一八まんくう御本社の地むかしは松か岡と申て大しよ
くわんのかまをうつみ給ひし地也此所に／松か岡の明神とてい
なりの社ありしをよりともし卿けんきう二年に地主いなりを同西
方／の丸山にうつして八まん宮をへつしてくわんしやうよりよ
しさかみの守ににんしかまくらに下向／の後八まん太郎よしい
へかまくらにて出生し給ひよしいへむつの守東夷しやうくん

(表紙ウ)／

にんしかまくらにきよしゆし給ひ下野守源よしとも其裔也かま
くらすみ給ひし也／右大将よりとも卿日本国惣ついふしを給て
父子三代平まさ子一代せつける二代しん王／家る四代合将くん
十代かまくらる天下を治む後たいこの天王の御宇かまくらのし
ゆつけん／平高時ほろひて後第八之宮をせいぬしやうくんにす
へ奉らる其後あしかゝ尊氏卿の／子孫くわんれいとしてかまく
ら居宅して治給ひし也相模国かまくら郡小林の郷／鶴岡山。二
王門むかしは八あし門也。舞殿かくら所也。下宮若宮大権現
しつか／此所にて有 治承四年頼朝卿此所へくわんしやう也毎年四
月三日御さい礼あり／一かうらの社玉たれの明神也。三嶋あつ
た三輪すみよし明神社。石のきさはし／東になきの木西にいて
うの木有此いてうの木の下に当宮大別当あしやりくきやうかく
れ／いてさねとも卿を打給ひし所也。ろうもんくわいらう南す
みにさふれいのたんしよとて／まい日ちうや天下泰平の御きと
う行法の所有又西の方に小御くうしよ有。上宮／八まんぐう也
御宝物多し。建久二年によりともくわんしやうし給ふ也まい
年／八月十五日にほうせうえ御さいれい同十六日やふさめすま
ふ同夜ほうへい有(第一丁オ)／
二月十一日の初の卯日へいしうほうへい御神事。武内社。けい
きやう天皇る／天子六代たうりうの臣也ことふき三百十七才。
六角堂御経奉納の堂也／一つるかめ石りゆうしんやうかう石
也。かまくら山大しん山かまくら右大臣の哥にみやはしら／ふ
としき立て万代〔に〕今そさかへんかまくらの里。よりとも

やしろしらはたの明神／よりとも卿の事也正月十三日此やしろにて御さいれい有つるか岡くそうそう／しやうゐんにて法事有。大御供所本尊みるめの明神。丸山いなりのやしろ／当所ちしゆ松か岡明神也。あいせん堂二位のあま本尊ちそうも有。さね／とも社りうえい明神則さねとも也。新宮大権現社後鳥羽院いらい／奉也。りんそうとうほんの一切経納有。天照太神の社。松どう天神源太夫／えひす大こくの社。ごまとう本尊五大尊明王／。大塔本尊。五ちのによらい也。／しゆるうかねのめい正和五年二月日。やなきはらたきさは。やくし堂神宮寺と申／せうけん二年さねともしやうくんこんりう。すわの社からもんの跡。山王のやしろ／とりあわせはらやふさめは、南方にとりゐ有り。あかはしはすいけ嶋七つ有(第一丁ウ)／東かた弁才天の社有。一之鳥居ゆきのした置石町中の一段たか道をおき／道とも段かつらともいふよこ大路わかみやこうしは、小路。中鳥居小丁口ひは小路／ひははし。大鳥居わきにはたけ山六郎しけやすせきとう有。下若宮ふるち。大鳥居の東に有。ゆいのはまかつを左まきのささみ名ふつとして多し一之鳥居が十八丁有。つるか岡／十二かゐん昔廿五坊也靈仏すた有よりとももとよりくわんおん有。神主小別当／并社家四十余人役人多し。つるか岡が東の方。すしかへはし雪の下大蔵丁／一よりともやしき伊豆があわかつさをへて治せう四年十二月十二日此所まはた／父子三代平まさ時まもすみ給ふ其後正治元年正月十三日于時五十三きよ／一法花堂よりともものちふつたう也山のうへによりとももの御せきとう有。西御門／東御門大くら村えから天神たから物多しう

たのはし。文寛やしきせん／川。大御とうか谷七とうからんのあとありしやか堂か谷。からいとのろう。いぬかけか／谷衣かけか谷ともきぬはり山たんしやく石たんしやく井二かいとうむら／一しゆふう山かくおんし平さたときこんりうかいさんしんえおせう此地(第二丁ウ)／

やくし堂か谷也本尊やくし也くる地藏たう有むね立の井弘法こま堂の跡／。大薬寺本尊こゝろみふとう。大塔宮土のろう後だいてんわうの王子也足利／なをよし此所へおしこもり後に奉討。理智光寺かいさんくわんきやう上人さやあみた／大とうの宮せきとう大山ふとうをいたるたゝらは有。師々がんしゝの形にたる故也。／すいせんし源基氏こんりうかいさんむそうこくし一らんてい天台山と云山有／。杉本くわんおんかいさんきやうぎ坂東札所第一ほう国寺源尊氏の祖父家／時こんりうかいさん仏乗せんし此辺たくまか谷といふ。なめり川昔のかい／とうはししいの跡有。青戸左衛門銭をおとせし川也十二所村十二郷か谷いなり／坂いなり山淨妙寺五山第五かいさんたいかうおせう大くらのいなるのやしろ有／。胡桃か谷御馬ひやしばい、もり山くるみ川。公方屋敷源基氏のやしき也／。五大堂よりつね將軍のきくわん所也。かちはら平三かけときやしき。しほなめ／地藏。光そくし本尊ほうやけあみた。こほうか谷かうへつかあさいな切通／かちはら太刀あらい水。はなかけぢそう武州相州のさかいなり(第二丁ウ)／

従是東は武州六浦のしやう金沢也／。侍じう川あふらつゝみ。専光寺てるてのひめ守本尊有六浦むつら川六浦／橋。さんそう

かうらせか崎のりよりの石とう有。しやうてんさんきんりうゐん／ひせきさんとも云金沢四石の内とひいしといふ此山に有。せとの明神三嶋明神也／金沢八木之内じやびやくしん有又三本杉有。せと弁才天四石之内福石ありふ／せとはしてゐてのひめ松。金沢すさき町屋村。しやうめうし平あきとき／こんりうかいさん審海和尚并四石之内美女石姥石有。八木之内あをば／かいてせいこむめ「むめ」さくらもんしゆさくらふけんそうさくら此五木有くろ梅／といふは今なし。かまりやつ村手子明神。のうけんたう筆すて松ふうふ／松有。金沢八景 洲崎晴嵐 平方落鷹 野嶋夕照／内川暮雪 乙鱧帰帆 小泉夜雨 瀬戸秋月 称名寺晚鐘／是方道中新町四り／。鶴岡より南の方／一ほうかいし源たからうちこんりう開山五代国師此地北条九代やしき也(第三丁オ)／

行也。さかさ川同はしつし町つしやくし乱橋／れんり木有さいもくさ村。ふたらくしよりともこんりう開山文覚上人／。弁か谷きやうしか谷きりか谷。光明寺平つねときこんりうかいさんきしゆ／せんし。いゝしま六かくのゐわか江のしま。小坪村漁史の居所小坪切通し是方(第三丁ウ)／

三うらみさき。すみよし明神しゆすかけ松。三浦道寸のしろあとう有／此へんゆいかはま和田はたけ山ふりよくさせし所といへり。多古江川／六代御前のつか。あぶみすり山もりとの明神。佐賀岡よばかりの明神／。つるか岡を西の方。うくひすかやつしいち上人せきとう同いなるの社／新清水寺てつくわんおんくろかねの井いわやとう也日かねちそう松源寺／よりともこんりう。岩屋ふとう弘法大師作。扇か谷くわんれいやしき／あふきの井。花光院。しゆふく寺五山第三さねとものひやうせきとう有／かいさん千光国師平政子こんりう此地源氏代々のやしき跡也／。えいせう寺太田道灌のやしき也。源氏山はたて山へ給ひしと也。泉かやつ／いつみの井。浄光明寺平長時こんりうほうくわんのみだたかいの御えい／八坂ふとう其外靈仏多し矢拾の地藏あみ引ちそう。相馬天皇の／にんしやうの石塔。ふしはためすけのせきとう定家卿之御孫也(第四丁オ)／

。亀谷坂是方山之内へ出る也。坂中天神。藤か谷むめかやつかけきよ／かろうかけきよかまくらにてろうへ。かいそうしかいさんけんおうせんしそこぬけの井／本尊なきやくし。けわひ坂ありしとゆふしよ六本松。今小路かつかばし／。巽たつみかうじんこんりう人丸つ

かかけきよむすめ也。尊うちやしき跡。長谷小路／さいきよばし佐介か谷けかちはたけもりひさしき。笹目か谷藤九郎もり長。あまなはの神明の宮八まん太郎。いなせ川みこしがだけ。光則寺日ろう／の土のろう有。大仏同坂。長谷町宿谷村。長谷くわんおん坂東札所第四はん。御霊の宮かまくら権五郎。こくうそう堂ほし月の井。坂之下丁ごくらくし坂／れうせんか崎日れんあま。極楽寺開山にしやう平重時こんりう弁けいか／こしかけ松有。いなむらかさき願ひよしさたよこ手原そての浦。七里かはまおとなし／たき日れんけさかけ松行合川金あらい沢。小ゆるき。たもとのうら。こしこへ村／。満福寺へんけい。固せ村りうこうし日れん御なんの所。西行見かへり松有(第四丁ウ)／するか二郎笈やき松。江のしま下の宮上のみや御かりやいわやりうちこがふちまな／板いし新田四郎ぬけあな其外名所御霊物多し。つるか岡方北の方／一こふくろ坂よりつね将くんの御代此坂を切る。こふくさんけんてうし平時頼こんりう第一／開山大覚せんし此地むかしこく谷金龍水不老水大覚池。あらいえんま／からたせんのちぞう。杉か谷弁才天弘法大師の作。まりしてんひしゆかつまのさく也／。長しゆ寺源基氏こんりう開山古先和尚尊氏のせきとう有此地尊氏／ゐんきよ所也。山の内町くわんれいやしき跡。せんこうし。さいめうし平時頼こんりう／明月院上杉安房守こんりう浄智寺平師時こんりう五三開山第四仏源／ぜんしかんろすい。松か岡東慶寺ひくに寺也おとこをまられんと思ふ女いづらきみやつかへをのかまななりえんかくじ平時宗こんりう五三第二此寺へ入る廿四月をへて其心身／といふ

／干 時正徳三巳年改正者也 板元 一 (加) (図版二)
 (二)新板鎌倉名所鑑 「京保頃カ」刊 富田屋庄左衛門 半 六丁
 印面高さ二一・六糎。每半葉十三行(第二丁才のみ十二行)。前掲書にて若干触れたように、当書と前掲正徳三年刊本とは内容がほとんど同一である。当書は正徳三年版を簡条書きに直して改版したものとと思われる。例えば鶴ヶ岡八幡宮の項(前掲書第一丁才と対照願いたい)では「相模国鎌倉郡小林郡鶴岡山／一舞殿 かくら所也 一仁王門 むかしは八つ脚の門なり／一 下宮 若宮大権現 しつかほうらくの舞 治承四年に頼朝卿此所へ御勸請也毎 三日御祭礼御神事あり」
 年四月／一高良社 玉垂明神也 一三嶋 熱田 三輪 住吉明神社／一石階 東に榎の樹西に銀杏樹あり此銀杏の樹の下に当宮大別当阿／蘭梨公暁(後略)の如く書かれる。刊記は本文末に続いて記され「(前略)／十王堂はなれ山従戸塚式里右鎌倉の名所古跡数多雖／有之古老の書置たるを忠伝してことくく開板せしむる者也／板元 雪下 富田屋庄左衛門」この版元の富田屋庄左衛門は、貞享三年(一六八六)版(沢氏前掲書第五図)及び元禄四年(一六九一)版の鎌倉絵図刊行者たる雪の下にて旅館を営んでいた富田屋庄兵衛(斎藤氏)とは同一家の人である。江戸中期の絵図の刊行者に、斎藤六郎左衛門と同七郎左衛門もいるが、彼らも又、一族であろう。これら三者の図柄は非常によく似ている。蜂屋文庫本は長沢規矩也氏所蔵本より早印であるが、表紙を欠失している。(蜂・規)(図版二)

(三)新鎌倉名所記 富田屋庄左衛門 半 六丁

印面高さ一九・九糎。每半葉十四行(表紙ウ及び次葉は十三行)。

(一)にて述べた如く、当書以後の諸版と前掲書(一)(二)とは遊覧巡路や記述がかなり異っている。当書には刊行年記がないので、前掲二書との前後関係はよくわからないが、恐らく富田屋庄左衛門が(二)の簡条書きの形式から当書の形に改版し、その際若干適切なコースに改め、訂正を加えたものである。この新しい巡路は「新編鎌倉志」と大体一致している。前掲二書と較べると、新たに正宗屋敷と並び、運慶屋敷が記される等、内容にも若干の差異がある。刊記は本文末に記され、「市場村はなれ山はの戸塚へ二り九丁 板元富田庄左衛門」。後印本である長沢氏及び沢氏所蔵本には右の刊記の内、「富田庄左衛門」がない。版木より、版元部分を削除したのである。当書は沢氏前掲書にて、金沢八景・逗子・葉山・江の島を除いた全文が翻字されているので、同書には省略されている部分のみ左に記す。

(東方)

「(前略) 従是東は武芻六浦庄金沢也／侍従川油つゝみ専光寺てるての姫守本尊有六浦川六浦／橋三ぞうか浦せか崎のりより石塔有昇天山金龍院飛／石山共云金沢四石の内飛石といふ有此所にて放下僧あたを復し／たる所なり瀬戸弁才天社四石之内福石有瀬戸橋てるての／姫松。す崎村町屋村称名寺平のあき時こんりう開山審海／和尚四石の内美女石姥石有八木の内青葉の楓せいご梅／黒梅さくら梅文殊さくらふげんぞうさくら其外宝物

多し／萑か浦といふ所にひとつ松有八木の内也かまりや村手子明神／能見堂金岡か筆すて松ふうふ松有雪下ふ是迄二里此所に／ていけいよく見ゆる也八けいは洲崎晴嵐。平方落厂。野嶋(第四丁才)／夕照。内山暮雪。乙鞆帰帆。小泉夜雨。瀬戸秋月。／称名寺晚鐘。以上八けいなり詩哥有り今爰に略す」

(南方)

「(前略) 岩殿観音坂東礼所第二ばん也多古江川六代御前御さい／ごの所也同塚あり鏡摺山。杜戸明神飛混柏千貫松／よりも腰かけ松名嶋左りまきのさゝい此所の名物なり／しんなし村佐賀岡世計明神雪下る是迄壹里余(第五丁才)」

(西方)

「(前略) 小ゆるき八王子社腰越満福寺本尊葉師弁慶自筆の／状有同硯池龍口寺日蓮御難所首座石土のろう有龍口／明神かたせ村かたせ川西行見廻松駿河次郎笈焼松もろこしか／原／砥上か原八つ松原。江嶋弁才天金龜山与願寺と号す也／下之宮上之宮御かりやいわや別当岩本院下之坊上之坊何れも／宝物多しちご洩まな板石龍池仁田四郎ぬけ穴泣面か崎／聖天嶋鶴嶋其外名所多し雪の下よりは迄二里(第六丁才)」

(諸・規・沢)(図版三)

(四)新鎌倉名所記 半 六丁

印面高さ二〇糎。每半葉十四行。

前掲書(三)と巡路は同一であるが、名所にはかなりの出入りが見られ、前掲書(三)にあった大友ヶ谷・うんけいやしきがなくな

り、当書以降には土佐坊屋敷跡（「新編鎌倉志」と同位置）・佐介いなり・けかはたけ・さいきよばしがでてくる。本文巻末は(三)と似ており、「(前略) 十王堂／市場村はなれ山是乃戸つかへ二り九丁」。表紙も又、(三)とよく似ている。当書及び(三)の表紙左方にある書名の四周の罫は単辺であるが、次掲書(五)(六)は双辺である。当書と次掲(五)(六)の本文は、互いに覆刻関係ある別版であるが、いずれにも刊行年記がないので、前後関係は明白ではない。表紙の形が、より古いものと似ている当書が、この三書の中では最も先行するものと考え、当論では当書を始めに配列した。丁付は表紙より数え、丁数は版心或いはのどに刻される。次に全文を翻字する。

「相州鎌倉の郡はむかし大しよくわんかまたり公今たかま子と申せし比／鹿嶋さんけいの時当地ゆいの里に宿し給ひける夜れいむの事有に／よつて年比持たまふかまを大蔵山の松岡にうつみ給ふ此ゆへに鎌／倉郡と申是によつて大くら山をかまくら山と名付く則かま／をうつみたまいし所は今八幡宮御本社の所也。ちんじゆふの／將軍けんいよの守よりよしちよくをかうむり奥州あべの／さだとうせいばつの時かう平六年八月石清水の若宮を当地／由井の郷鶴岡と申所にくわんじやうし給ふ今下宮若宮大権現也／治承四年源の頼朝公由井の鶴岡若宮を小林の今の宮地に／うつし奉り給ふ此ゆへに今此所を鶴岡といふ也。八幡宮の御／本社の地むかしは松岡明神とていなりのやしろ有しを建久／二年頼朝公地主いなりを同西方丸山にうつして八幡宮をあら／たにくわんじやうし給ふ。よりよし相模守ににんじ

鎌倉に下向の／後八まん太郎よしいへかまくらにて出生し給ひよし家陸奥守（表紙ウ）／

せいゐる將軍ににんじ鎌倉に居住し給ふ右大将よりも卿／日本惣ついふしを給はつて父子三代平政子一代せつけが二代／親王家が四代合て將軍十代かまくらより天下を納給ふ／ごたいごの天皇の御宇相模入道平高時ほるびて後第八／の宮をせいゐる將軍にすへ奉らる其後足利尊氏公の子孫／くわんれいとしてかまくらに居宅して納たまいし也／相模国鎌倉郡鶴岡山八幡宮／一の鳥居赤橋左右にはす池有り嶋七つ有右の島に弁才天の／社有二王門の前南方に鳥居有る小路矢ぶさめ馬場と云二王門／むかしは八足門也舞殿神樂堂也左り方こま堂本尊五大明王／りんざう唐本の一切経納て有り天照大神の社松童源太夫／天神夷社有り右之方大塔本尊五智如来若宮大権現社／有り此所に而しづかほうらのまい有し所也

く毎年四月三日に御祭礼有り住吉明神／三わあつた三嶋明神かうらの社玉たれやくし堂神宮寺しゆるう堂（第二丁オ）／

鐘名正和五年二月日と有り石のきざはしをのぼれば東に／なぎの木西にいてうの木有り此木のもとにて当宮大別当／あじやりくぎやうかくれいてさねとも公を打給ひし所也上宮／ろうもんくわいろう右の方にさふれいのたん所有り昼夜／天下泰平の御きとうおこたらず左りの方に御供所有御本／社八幡宮御宝物多し毎年八月十五日ほうぜうゑごさい礼／同十六日やぶさめすまふ同夜ほうへい有り二月十一月初の卯ノ日／べいしよほうへい御神事有り武内の社けいきやう天皇乃天子／六代とよりやうのしん也ことふき三百拾七歳六角堂御経奉納／の堂也鶴亀石龍神

ようがう石あいぜんとう二位尼本尊地藏／ぼさつ丸山いなりの社当所地主松岡明神是也白はた明神／頼朝公をいわぬ奉る毎年正月十三日御神事十二院の内相承院／にて御法事有り大御くう所本尊みるめの明神西のきざはしを／下りりうえい明神実朝公をいらい口新宮大権現の社後鳥羽院をいわる(第二丁ウ)／

奉る六本杉とて名木有り鶴岡十二院むかしは廿五坊なり／もとのりの観音其外れい仏靈宝あまた有り神主小別当／社家四拾余人御神料永楽八百四拾貫文余也／一の鳥居雪の下置石町中の一一段高き道をおきみち共段かづら共／いふ横大路を若宮小路と云馬場小路中鳥居小町口ひわ小路／びわ橋大鳥居わきにはたけ山六郎しけやすの石塔有下若宮／古地は大鳥井東に有り一の鳥居かゆいの浜迄十八丁有り／鶴岡東の方／すはの社から門の跡山王の社柳原滝沢鳥合原筋違橋雪の／下大蔵町より朝やしき伊豆があわかつさをへて治承四年十二月／十二日此所へわたまし父子三代平政時も住給ふ其後正治元年正月／十三日に行年五十三に而かうぎよ法花堂頼朝持仏堂也山の上に頼朝／御石塔有り西御門東御門えから天神宝物多し二かいどう村／大楽寺本尊こゝろみ不動。じゆほう山覚園寺永仁四年(第三丁オ)／

平定時こん立しんえ和尚此所やくし堂が谷也本尊薬師也／黒地蔵堂有りむね立の井弘法大師ごまだんの跡山の上に有り／後だいいご天皇の皇子大塔宮土籠有り足利なをよし此所へおしこめ／後に打奉る理智光寺開山願行人人本尊さやあみた山の上に大塔宮／石とう有り大山ふどうをいたるたゝら場の跡有り獅々がんしゝの形に／にたるゆへ名付也。瑞泉寺源基氏こん立也開山は

むそう国師本尊／釈迦うしろの山をいちらんていといふ天台山といふ山有うたの橋文覚や／しきざせん川大御堂が谷七とうから跡有りんしやか堂か谷犬かけか谷／衣かけが谷共いふがきぬはり山たんじやく石たんにやくの井唐糸が土籠杉本観音／開山行基也坂東札所第一ばん也。報国寺源の尊氏祖父いよの守／家時こん立也開山仏乘禪師也此辺をたくまが谷と云なめり川／むかしのかい道橋ぐいの跡有青戸左衛門銭を落せし川也十二所村／十二郷が谷いなり坂稻荷山。浄妙寺五山第五開山たいごう退耕和尚大／蔵いなりの社有り胡桃か谷御馬ひやし場いゝもり山くるみ川(第三丁ウ)／

公方やしき源の基氏のやしき也五大堂よりつね將軍きくわん所也／梶原平三景時やしき塩なめ地藏光触寺本尊ほうやけあみた／午房が谷首へ塚あさいな切通し梶原太刀あらい水はな／かけ地藏武州のさかいに有ゆへさかいの地藏共いふ也／従是東は武劬六浦の莊金沢也／侍しう川油つゝみ専光寺てるての姫守本尊有り六浦はし三／ぞうが浦せか崎のりよりの石塔有昇天山金龍院飛石山共いふ金沢／四石の内飛石といふは此山に有瀬戸明神三嶋明神也金沢八木の内蛇しやひやく混／柏有又三本杉有此所に而放下僧あたを復したる所也瀬戸弁才天四石／の内福石といふ有瀬戸橋てる手のひめ松金沢すぎき村町屋村／。称名寺平のあき時こん立開山審海和尚寺内四石の内美女石／姥石有八木の内青葉もみち。せいこ梅。さくら梅。文珠桜／ふげんそうざくら。黒むめは今はなし右五木有其外寺宝多し笹が／浦といふ所にひとつ松有金沢八木の内也かまり屋村手子明神(第四丁オ)／能見堂金岡筆すて松。ふう婦松有り 雪の下は是迄二り／金沢

八景／洲崎晴嵐 平方落鷹 野嶋夕照 内川暮雪／乙鞆帰帆 小泉夜雨 瀬戸秋月 称名寺晚鐘／鶴岡より南の方／金龍山宝戒寺源尊氏こん立開山五代国師本尊唐仏経よみ地藏尊／并に寺宝多し此地北条九代屋敷也北条高時の社有り屏風山小富士山／かさいが谷東勝寺のきうせき土佐坊やしき跡元弘三年五月廿二日／さかみ守高時一門二百八十三人すべて八百七十余人せつふくの所也高時はか所／あり小町塔の辻妙りう寺大巧寺本覚寺えひす堂橋大町への井／比企谷妙本寺此寺日れん上人せつほう初めの寺也日蓮真筆のまん／だら有り比企判官きうせき也寺宝多し左竹天王やしる有（第四丁ウ）／

米町延命寺本尊はだか地藏教恩寺さか川辻町辻薬師乱橋／材木座村補陀落寺頼朝こん立開山文覚上人寺宝多し弁か谷／きやう師か谷桐か谷光明寺平つね時こん立開山きしゆ禅師靈仏／寺宝多し飯嶋六角の井和賀江嶋小坪村同切通し正覚寺／住吉明神数珠かけ松三浦道寸の城跡有此辺由井か浜和田／はたけ山ふりよいくさせし所といへり名ごへ村田代観音坂東札所第三／ばん也安養院開山願行上人花か谷左竹やしき五本ほねの山あり／蛇か谷松葉か谷安国寺長勝寺石井日蓮乞水有り名こへ切通し／此切通かまくらと三浦のさかい也御さる畠山岩殿観音坂東札所第二ばん也神嵩天狗こしかけ松多古江川六代御前御さいごの所也同／塚有りあぶみすり山守殿明神宝物多し飛混柏千貫松有／頼朝こしかけ松高石名嶋とつとの嶋心なし村佐賀岡世計／明神雪の下是迄巻り余／鶴岡西の方（第五丁オ）／

新清水鉄観音くろかねの井うくいすか谷志一上人石塔同いなり

社／いわやどう松源寺本尊日金ちぞう頼朝公こん立いわやふとう明王／弘法大し作華光院上杉くわんれいやしき亀か谷寿福寺第三開山／千光国師本尊しやか俗にかごじやかといふ平政子こん立絵かき／やくらさねとも石塔有此地源氏代々屋敷跡也英勝寺太田道灌／のきうせき源氏はた立山共いふ八まん太郎此山に白はたを上げ東国／ぜいを集給ふ泉か谷いつみの井浄光明寺平長時こんりう／宝冠のみだ八坂ふどうたがいの御影慈恩院矢拾ちぞうあみ／引ちぞう藤原為相石とう定家卿の御孫也相馬天王祠忍性／石塔藤か谷扇か谷扇の井十六の井海蔵寺開山源翁／禅師本尊啼やくしそこぬけの井かげきよが籠梅か谷つゞきの里けわい坂むかし遊女有しと云六本松葛原岡今小路勝か橋正宗屋敷／やきはのいなり巽荒神人丸つかかけきよがむすめ也尊氏やしきさいきよ橋／西行橋共いふ左介が谷同いなるの社かくれざと福神銭あらひ水（第五丁ウ）／

天狗堂七観音堂か谷けかち畠佐佐目か谷藤九郎もり長跡也／甘なは明神八まん太郎氏神也盛久頸座いなせ川宿屋村光則寺／日朗土の籠大仏同切通しみこしがたけ長谷町長谷観音／坂東札所第四ばん也御霊の宮かまくら権五郎星月の井こくう／ざう堂坂の下町切通し極楽寺開山忍性ほさつ平重時／こん立千ぶく茶うす其外寺宝多し弁慶こしかけ松月かけ／が谷針すり橋稲村か崎よし貞願をかひかたに成し横手原霊山が崎日蓮雨乞の所也袖の浦十一人塚七里が浜音なし滝日れんけさかけ松／行合川金洗沢小ゆるぎ八王子の宮有り小動の松こしこへ村／満福寺開山行基本尊やくし硯池弁けい自筆状有り同／こしかけ石たもとの浦龍口寺日蓮首座石同土の籠此

所か／御難所也龍口明神かたせ村同川西行見返松駿河二郎笈／
焼松唐原砥上原八松か原／江嶋金龜山与願寺と号す 雪の下是
迄二り(第六丁オ)／

巖本院下の坊上の坊何も宝物多し無熱池かま石福石碑石／ちご
がふち龍穴内に名所
多く有魚板石龍池仁田四郎ぬけ穴泣面が崎／聖天嶋
鵜嶋其外名所多し／鶴岡が北方／こぶくろ坂青梅聖天あらいえ
んまからだせんぢそう建長寺五山
第一開山大覺／禪師平時頼こん立
金龍水さんへき池影向の松不老水大覺池其外寺宝／名所多し爰
に略す杉か谷弁才天弘法御さくまりしてんひしゆかづまのさ
く／龜が谷坂中天神長壽寺源基氏こん立開山古先和尚尊氏石塔
有／其外寺宝多し山内町くわんれいやしき禪(ん)與寺平時頼こん立
六国見／明月院上杉安房守こん立寺宝多し瓶の井淨知寺平時時
こん立／五山第四開山仏源禪師甘露の井松か岡東慶寺比丘尼寺
也／夫をきらひつらきみやづかへをのがれんと思ふ女此寺へ入
る廿四月をへて其の身まゝ也／円覺寺五山
第二開山仏光禪師平時宗
こん立寺宝名所多し十王堂／橋市場村はなれ山是が戸つかへ二
り九丁) (規) (図版四)

(五) 新板鎌倉名所記 半 六丁

印面高さ一九・九糎、毎半葉十四行。

前掲書(四)とは覆刻関係ある別版である。只し表紙の書名部分の
四周の罫が双辺になっている。丁付は前掲書と同一であるが、
丁数刻記はのどにある。刊記はない。長沢氏所蔵本の一部(規
一)は他より一まわり(高さにて一糎)ほど大きい。(金・

規一・規二)

(六) 新板鎌倉名所記 罫 半 六丁

印面高さ一九・九糎、毎半葉十四行。

前掲書(四)とは覆刻関係ある別版で、表紙は(五)とよく似てい
る。或いはその直接の覆刻であるかもしれない。表紙の右大臣
の和歌「みやはしら／ふとしき立て／万代に／今そさかへん／
かまくらの里」の下に「罫」と刻記がある。「罫」の名は年記
のない江戸中後期頃の「鎌倉絵図(沢氏前掲書第八図)」の版
元に見られる。鎌倉在住の版元と思われるが、今の所どうい
う家かわからない。丁付は前掲書(四)と同一であるが、丁数は各
葉の版心に刻されている。「鎌倉名所記」で丁数刻記が版心に
あるものは江戸後期以降の諸版に多い。当書と罫版鎌倉絵図と
の関係に興味がもたれる。(規・沢一・沢二) (図版五)

第二種本(鶴岡八幡宮を中心に東・南・西・北・西南・金沢八
景の順)

(七) 天明四新板鎌倉名所記 鎌扇人編 天明四(一七八四)刊 半

六丁

印面高さ一九・八糎、毎半葉十四行(第三丁ウのみ十五行)

当書の表紙は第一種の諸版とは若干異り、上段には「江嶋めい
しよつけ」の次に「其外谷七郷十井十橋／鎌倉七切通五山有／
余略之」が記され、下段には右大臣の和歌の次に「其外名人詩
哥多しといへ共略之／新板物追々出来仕候」が加わる。左行の

書名上には「天明四／新板」の角書きが付される。この第二種本の遊歴巡路は第一種本と異り、東の方面では朝比奈峠と鼻穴地蔵、西の方面は極楽寺切通しにて止め、その先にある金沢八景及び極楽寺より江の島迄を本文末に各々別項を立てて記述している。この第二種本に於ける各方面の巡路はほとんど「新編鎌倉志」と同じである。内容に於ても、源氏山に八幡太郎の旗竿の跡があるという記事等、同書に類似した点が多く見られる。特に英勝寺の所で「東光山英勝寺太田道／灌きうせき也水戸源朝臣頼房郷寛永十一年御建立委敷は／鎌倉志に詳なり」が記されるので、同書を参考に行っていることがわかる。次掲書(八)は当書と同内容なので、これと同文の記載がある。更に当書には鶴岡八幡宮の項にて神主大伴山城・小別当大庭永尚の名が見える。大伴山城は第二十代(天明一文化一)の神主である。この神主・小別当の二名の記載は以後第三種本に於ても踏襲される。版心に丁数のみ刻す。著者兼発行者と思われる鎌扇人とはいかなる人かわからない。「鎌倉扇ヶ谷住人」ということであろうか。次に全文を翻字する。

「相州鎌倉の郡はむかし大しよくわんかまたり公未鎌子と申せし頃／鹿嶋さんけいの時当地由比の里に宿し給いける夜靈夢の事有に／よつて年比持たまふ鎌を大蔵山の松岡にうつみ給ふ此ゆえに鎌／倉と申也是によつて大くら山をかまくら山と名付く則かまを／うつみたまいし所は今八幡宮御本社の所也。ちんじゆぶの／將軍けんいよの守頼義ちよくをかうむり奥劔あべのさだ／とうせいはいつの時かう平六年八月石清水の若宮を此里／由

比の郷鶴岡と申所にくわんしやうし給ふ今下宮若宮大権現也／治承四年源頼朝公由井の鶴岡若宮を小林の郷今の宮地／うつし奉り給ふ此ゆへに今此所を鶴岡とは申也。八幡宮の御／本社
の地むかしは松岡明神とていなりのやしろ有しを建久／二年頼朝公地主いなりを同西方丸山にうつして八幡宮をあら／たにくわんしやうし給ふ也頼義相模守にんし鎌倉に下向の／後八まん太郎義家かまくらにて出生し給ひよし家陸奥守(表紙ウ)／せいゐる將軍ににんし鎌倉に居住し給ふ右大將よりも卿／日本惣ついふしを給つて父子三代平政子一代せつけ／二代／親王家が四代合て將軍十代かまくらより天下を治給ふ／ごたいご天皇の御宇相模入道平高時ほるびて後第八の宮をせいゐる將軍にすへ奉らる其後足利高氏公の子孫／くわんれいとしてかまくらに居宅して治たまいし也／相模国鎌倉郡鶴岡山八幡宮寺／一の鳥居を入石の反橋是を赤橋といふ左右にはす池嶋七つ有右の嶋は弁才天の／社有二王門前の小路左右に鳥居有やふさめ馬場といへり二王門／むかしは八足門也舞殿神楽堂といふ左り方ごま堂本五大明王りん／ざう唐本一切経納て有り後堂天照大神の社松堂源太夫／天神夷社有り右の方大塔本尊五智如来若宮大権現社／有り此所しつ所のほうらくし所と云毎年四月三日に御祭礼有り住吉明神／三わあつた三嶋明神かうらの社玉たれ明神と云やくし堂神宮寺といふしゆるう(第二丁オ)／鐘銘正和五年二月日と有り石のきざはしをのほれば東に／なきの木西にいてうの木有り此木のもとにて当宮大別当／あじやりくきやうかくれいてさねとも公を打ち給ひし所也上宮／ろうもんくわいろう右の方に座さまづのたん所有り昼夜／天下安全の

御祈禱おこたらず左の方に御供所有御本／社八幡宮御宝物多し
毎年八月十五日放掌會御さい礼／同十六日やふさめすまふ同夜
ほうへい有り二月十一月初の卯の日／べいじよ初卯の神業ほうへ
い有り武内の社けいきやう天皇の天子／六代とうりやうのしん
也ことふき三百拾七歳と云六角堂御経奉納／の堂也鶴亀石龍神
ようがう石あいせんとう二位尼本尊地藏／ぼさつ丸山いなりの
社当所地主松岡明神是也白はた明神／頼朝公をいわる奉る毎年
正月十三日御神事十二院の内相承院／にて御法事有り大御くう
所本尊みるめの明神西のきざはしを／下りりうえい明神実朝の
新宮大権現社後鳥羽院いらい奉る（第二丁ウ）／
六本杉とて名木有り天狗すむといへりむかしは廿五院也今十／
二院被成る也頼朝もとどり観音そうじやう院に有其外靈仏靈／
宝多しと云共略之神主大伴山城諸大夫給はる也少別当は／大庭
永尚ほうくわんのたぐい也正月十一日其外社家楽人八乙女共
に／四拾余なり神料永樂八百四拾貫文余也惣名雪の下中の／一
段高き所をおき道共段かつら共云東大路を宝戒寺かうじ／西大
路を若宮小路と云同馬場小路中の鳥居小町口ひわ小／路ひわ橋
三の華表とらひ畠山重保石塔下宮旧地石清水大華／表雙東に有一の鳥
居よ由比浜迄十八町此所ふし山いつはこね大しま一すはの社から
門の跡山王社柳原滝沢鳥居合原すじかいばし／大蔵よりとも屋
敷跡治承四年十二月十二日此所へわたまし父子三／代平政子も
住給ふ也其後正治元年正月十三日かうぎよ法華堂／頼朝持仏堂
也山の上に頼朝卿御墓有り西御門東御門えがら／天神社社宝多
し二かいどう大楽寺こゝろみふどうしゆほう堂（第三丁オ）／

覺園寺永仁四年平定時（平定）こん立開山しんえ和尚やくし堂か谷／葉
師十二神尊氏むな札ある黒地藏むね立の井弘法こまたんの跡山の
上／有大塔の宮土のろう足利たゝよし此所へおしこめ後に打奉
る／理智光寺開山願行本尊さやあみた大とうの宮石とう大山／
ふどうたゝらばの跡師々がんしゝの形にたり瑞泉寺基氏もとこん
／立開山むそう国し本尊釈迦へんがいいらんていの跡天台山／
歌の橋文覚やしき座ざぜん川大御堂七とうからんの跡よし朝の為に／し
やか堂犬かけか谷衣はり山たんしやく石同井唐いとのろう杉
本／くわん音開山行基き札所第一也たくまの報国寺尊氏祖父家
時／こん立也開山仏乗むかしのかい道橋ぐいの跡なめり川青戸
左／へもん一錢をひるわせし川也十二所十二郷共いなり坂稻荷
山／浄妙寺五山第五開山退耕藤山たいこういなり社胡桃か谷御馬冷／し
場いゝもり山くるみ川公方屋敷五大堂將軍よりつねき／くわん
所也梶原やしき塩なめ地藏光触寺ほうやけあみだ牛房（第三丁
ウ）／
か谷かうべ塚朝伊奈切通し梶原太刀あらい水はなかけ／地藏武
蔵相模のさかい也故にさかいのじそう共いふ／一金龍山宝戒寺
源尊氏こん立開山五代国師本尊経よみ地藏唐／仏也地宝多し此
地北条九代屋敷也北条高時社屏風山小富士かさか谷東勝寺の跡
土佐坊やしき跡于時元弘三年五月廿二日相／横守平高時一門二
百八十三人すへで八百十余人せつふくの所也高時はか／所有小
町塔の辻妙りう寺大行寺本覚寺えびす堂橋大町へやの井／比企
谷妙本寺此寺日蓮上人せつほう初めの寺也日蓮眞筆のまん／だ
ら有り池上本門寺の比企判官旧地宝物多し佐竹天王やしる／米町

延命寺本尊はだか地藏教恩寺さか川辻町辻の薬師／乱橋材木座
補陀落寺より朝こん立平家赤旗寺宝多し弁か谷／きやうしか谷桐
か谷天照山光明寺平つね時こん立開山きしゆせんし／靈仏靈宝
多し飯嶋六角井和賀江嶋小坪同切とふし正覚寺住／吉明神し
ゆずかけ松三浦道寸の城跡此辺由比浜せんしやうの（第四丁
オ）／

跡なり名越むら田代くわん音坂東札所第三也安養院開山願行／
花か谷佐竹やしき五本ほねの山有り蛇か谷松葉か谷安／国寺長
勝寺石井日蓮乞水なごへきり通しかまくらぐ三崎／浦賀の切通
し也御猿島法性寺岩殿くわん音札所第二神かしのたけ嵩／神武寺天狗か
け松多古江川六代御前御さいの所也同塚／有りあぶすり山杜戸
明神宝物多し飛柏千貫松井／頼朝こしかけ松高石名嶋とつとの
嶋心なし村佐賀岡世計明神／雪の下は是辺迄壱り余／一新清水
の鉄観音くるがねの井うくいすか谷志一石塔同いなり社／岩や
ふどう松源寺本尊開運地藏頼朝伊豆の日金を此所に／うつす華
光院上杉くわんれい屋敷龜谷寿福寺五山第三開山は／千光げん
びら尺書にかなり本尊かごしやと云平政子こん立絵かきやぐら／実朝石
塔有此地源氏代々屋敷跡也東光山英勝寺太田道／灌くわんきうせき也
水戸源朝臣頼房卿寛永十一年御こん立委敷は／鎌倉志に詳つまひりか
なり源氏山おぼた旗立山杯共云八まん太郎（第四丁ウ）／
此山にてはたを上東国勢ひを集め給ふ旗竿の跡とて有り／泉谷
泉の井泉谷山浄光明寺平長時こん立本尊宝冠の／みだ八坂ふど
う八幡弘法互ひの御影もんかく此寺へ持所なり矢拾地ひろいぞう／足利たよよし
こん立網引地あみぞう為相卿石塔藤谷峯にあり／扇の井扇谷海蔵寺

開山源翁のう禅師那須のせつせう石を打くたく本尊／啼薬師そご底ぬけ井十六井しな古く有
て方名付也景清か牢梅谷綴／喜の里けわい坂葛原か岡六本松はなは
中へ出る雪の下道か藤沢／宿え二り半有り／一勝橋今小路正宗屋
敷内いなりたみか荒神人丸塚むすめ尊氏や／しきさいきよ橋佐介
か谷同いなりかくれ隠里福神銭此所谷々天狗堂七くわん音か
谷けかち島佐々目か谷藤九郎もり長あまな甘縄明神八まん太郎盛久くひ
のざの跡長谷町同観音札所第四屋とや光則寺／日朗土うらの牢大仏
見越か嶽大仏切通し此道ふし沢えの大きくわん也／一御霊の宮
権五郎景政のやしろなり星月の井こぐら蔵堂坂の下町極楽寺（第五丁オ）／
坂雪の下江の嶋まで二りの余江の嶋ふし沢迄一り有り／一
鶴岡か北巨福路坂のほればあを梅の聖天新居のえんまからた
せん地藏巨福山建長寺関東五山の第一なり平時頼こんりう開山大覚禪師
金竜水さんへき池影向の松不老水大覚池其外寺宝名所多し／杉
谷弁才天弘法のさくと云まりし天ひしゆかつまのさく龜か谷
口長寿寺基氏もとこん立開山古先和尚尊氏石とう有京にてはとうじじ
はと云しゆ寺宝多し瓶かみの井浄智寺五山の第四平師時こん立山の内宿／上
杉安房守亦くわんれい屋敷せんかう禪興寺平時頼こん立最明寺／旧跡明
月院開山仏源ぜんし寺宝多し六国見甘露の井／松か岡東慶寺比
丘尼寺也喜連川左兵衛かふぞくするえん切るといふあしき身
持の男につれそう女せひなく這入二十四月へて／おつこの手を
はなるゝ也しかりといへ共乱に入事不叶したひに寄て／一家一
門のなんきにもなる其上二十四ヶ月間はしぶんまかない也／瑞
鹿山円覚寺五山の第五平師宗こん立開山仏光禪師第五丁ウ／

御舍利是をにく付のしやりと云 其外宝物名所多し略之十王堂橋／市場むらはなれ山栗舟常楽寺文殊亀鏡山大長寺今泉ふど／う女滝男たき岩瀬山崎笠間夫の戸塚元町へ出る雪の下は是／迄五十町道二り九丁有り此道筋雨天の節はあし／一鶴岡を西南は極楽寺切とふし開山忍性ほさつ平重時こん立千ふく／茶臼其外宝物多し弁慶こしかけ松月影の谷北林針すり橋稲／むらか崎太平記によし定金つくりの刀を龍神へけんし 横手原りやうせん 山崎日れん雨 袖の浦十四町か間干かたなりしと云は此所也 一人塚七里か浜云七里四十二町を以て……と云 音なし滝日蓮けさかけ松行合川／金洗沢小ゆるき八王子の宮小動松たもと 要越満福寺開山行基本尊／薬師硯池弁慶腰越状こしかけ松袂たもと 浦片瀬龍口寺此所日れん上人 龍口明神かたせ川西行見返の松駿河二郎おひやま 笈焼松唐か原砥上原八／松か原夫江の嶋は金龜山與願寺えんの行者開く巖本院下の坊／上の坊宝物多しむねつちがま石福石碑石児かふち龍内に／さま／魚板石龍池仁田四郎ぬけ穴泣づらか崎しやう天し名所有り まう(第六丁オ) しま其外名所多し／一鶴岡を東北は武劬六浦莊金沢侍しう川油づゝみ専光寺てる／ての姫本尊有り六浦川むつら橋さんそうか浦せか崎のり頼石とう／昇天山金龍院飛石山共云四石一なり瀬戸明神也しやびや／くしん三本杉此所にて放下僧あたうち 瀬戸弁才天ふく石せと橋てるての／ひめ松す崎町屋金沢山称名寺平あき時こん立開山審海和尚／美女石姥石青葉紅葉せいこ梅黒梅さくら梅文殊桜ふけんぞう桜／皆八木の内なり寺宝多しすゝめか浦一つ松かまりや手子明神三しま 能見堂金岡筆捨松夫婦松其外名所多しといへ共略之／金沢八景／洲崎晴嵐 平方落鷹 野嶋

夕照 内川暮雪／乙輛帰帆 小泉夜雨 瀬戸秋月 称名寺晚鐘／天明四年甲辰 六月成 鎌扇人 免□再改(神)

(六)鎌倉名所記 寛政三(一七九一)刊 表具屋 半 六丁 四周単辺(二一・四×一五・一糎)。毎半葉十四行(第三丁ウのみ十五行)。

当書の本文には四周に単辺の罫が刻されるが、右の天明四年刊本(七)のかぶせ彫り系統に属する。行款は全く同一で、字様は大旨同書と同様であるが、当書は若干厚めである。当書には前掲書(七)にある各巡路の始めの見出しと「勝橋」「御靈宮」の首にある「一」がない。丁付は版心に丁数のみ刻される。表紙では前掲書(七)に見られた上段の「其外谷七郷」以下と下段の「新板物」以下がない。新たに下段には刊記が記され、右大臣の和歌の右下方に「板元岩谷堂／表具屋(印記)」、同左下方には「寛政三年改版」。陰刻で記された書名上方には足に短冊をつけた鶴が刻される。当書以降の諸版では、鶴の画が様々な形に変わり、描かれるようになる。当書の版元たる雪の下岩谷堂前の表具屋は後述第三種本中、最も先行すると思われる(四)をも刊行するが、鎌倉絵図の版元にこの名を聞かない。屋号から見て八幡宮の表具師(梶田姓)ではないかと思われるが、いかなる家であるか、今の所わからない。(前)(図版六)

(九)鎌倉名所記 寛政七(一七九五)刊 半 六丁 印面高さ一九・四糎。毎半葉十四行。

本文の内容は天明四年刊本(B)及びその覆刻たる寛政三年刊本(A)とは同一である。当書と両書の間には、覆刻関係はなく行款も異っているが、間々字様が類似している所もある。又、天明四年刊本(A)に見られた各巡路の首にある見出しの「一」が当書には記される。表紙は天明四年版(A)と寛政三年刊本(B)を組み合せた図柄で、右側の内容目次と右大臣の和歌は前者と同一であるもの、左側の書名部分は陰刻で記され後者に似ている。又、当書の書名上段には前掲寛政三年刊本(A)より始まる鶴の画が陰刻(Aは陽刻)で描かれている。刊記はその鶴の足につけられた短冊に記されており、「寛政卯七」。刊行者はわからない。

(金一・規・金二・沢)(図版七)

第三種本(鶴岡八幡宮を中心に東・北・南・西・江の島・金沢八景の順)

(鎌倉名所記「寛政末頃」)刊 表具屋 半 六丁

口印画高さ一九・五糎。每半葉十四行。

当書のテキストは以後、明治期に致る迄、十三版に使用される。第一種・二種本とは巡路のみでなく、内容にも違いが見られる。すなわち本文中に和歌や俳句の挿入がかなり増加している。当書の巡路の内、江の島と金沢八景を別項にしている所は第二種本と類似している。第三丁オの大倉付近に「法花堂頼朝持仏堂といふ豊後守忠久墓。頼朝べう。唐糸のろう」と記される。この豊後守忠久についての記載は第一種・二種本にはない。島津忠久の墓は安永八年に修復されたもので「鎌倉絵図」に於いても江戸後期の

ものから記載されるようになる。当書は寛政末頃の刊行と思われるので、墓が作られ二十年程の後に、名所になり始めて記載されるようになったのであろう。従ってこの第三種本は第一・二種本より後に成立したものと見てよい。更に以前の諸版では唐糸やぐらは現在旧跡とされておられる。更に以前の諸版では「新編鎌倉志」の説)指定しているが、当書以降の諸版は頼朝墓に隣る位置を示している。この唐糸やぐらは、右の他扇ヶ谷にもあったことが伝えられる。大倉の畠山屋敷・覚園寺裏山上のわめき十王(或いは石十王・十王)の名も当書にて始めて見られる。当書の本文はほとんど訂正されずに明治期迄、各版に伝えられる。小冊子の案内記に於いて当書同様に版を重ねたものに「改正南都名所記(奈良・絵図屋庄八版)」がある。その内、私の比較調査したものは安永三年・文政十年・天保十二年・万延二年の四版である。各版はかぶせ彫り関係ある別版である。文政十年版以降は安永三年版をもとにして覆刻している為、各版共に「安永三年迄七百七十年」という記載さえ改めていない。原刻書たる安永三年版のみ、興福寺及び春日神社領の石高と南都名物の一部が異っている。「鎌倉名所記」第三種本の先駆と思われる当書の表紙は第二種本の内、寛政七年刊本(A)と類似している。すなわち右方上部の内容目次は同様・同下方の右大臣の和歌の左には「其外名人の詩哥/多しといへども略之」が記される。書名の上段には足に短冊をつけた鶴が描かれている。当書の丁付は表紙ウより始まり各丁ののどに丁数が刻される。刊記は巻末にあり、「板元鎌倉岩屋堂前表具屋 梶田」。この

第三種本で最も年記の古いものは次掲寛政版(二)である。同書の表紙図柄が文化以降の諸版の先駆となつてゐるのに較べ、当書の表紙は第二種本の図柄を踏襲してゐる。又字様も当書が若干古様に見えるので、当書には年記がないものの、第三種本中、先駆のものと思われる。当書の版元の表具屋は第二種本では寛政三年版(六)を刊行している。内容の差異よりみて、当書はその改版と思われる。その際、表紙のみ、先行の第二種本の図柄を踏襲したのであらう。表具屋寛政三年刊本と次掲英富寛政刊本(二)との間(寛政末頃)に当書は刊行されたのであらう。次に全文を翻字する。

「相州鎌倉と申らんしやうは。天智天皇八年。大しよくわん鎌足藤原の姓を／たまひて内大臣に任す。此しゆくくわん成たるによつて鹿島さんけいありて／下向の時。此由井の郷にしゆくしたまひける夜。れいむのこと有て多年／たしなみ給ふかまを。大蔵山松か岡にうつみ給ふ。是よりかまくらの／こほりと申也。鎌をうつみ給ふ所は。今の八幡宮の御本社の所也。かゝる地成／によつて。大しよくわんのけん孫染屋太郎大夫時忠も居住し給ふこれ／養老神龜の頃なり。其後ちんしゆふ將軍けんいよの守頼義かうへい／五年奥劔安倍の貞任をせいはいつ有て。同六年さかみの守ににんず。／よつて同八月山城石清水若宮を。此由井の鶴岡にくわんしやうし給ふ／扱將軍さたもりの孫。上総介なをかたの娘をめとり八幡太郎／義家をまふく義家せい長ありて。むつの守東夷將軍ににんじ／鎌倉に居住し給ふ夫より年へて治承四年右大将頼朝。由比鶴か岡／若宮を。今の

宮地にうつし給ひてより鶴か岡と申也八幡宮の御本社／の地其頃松岡明神とて。稻荷のやしる有しを建久二年頼朝地ぬし(表紙ウ)／

稻荷を同西の丸山にうつし。此八幡宮をくわんしやうしたまふ／頼朝公の歌に「石清水たのみをかくる人はみな久敷世にも住とこそきけ／八幡宮の鳥井を入りて石のそり橋をあか橋といふ左右はす池嶋七つ有／右の嶋の内弁天の社あり。二王門むかしは八つ足門と云。左右の小路鳥居有／やふさめ馬場といふ。舞殿神楽堂有。左の方こま堂本尊五大明王りん蔵／天照太神社。松堂。源太夫。天神。えひす社。右の方たい塔。本そん五智によらい／若宮大権現東鑑に文治二年。源の義つねの妻しつかのまへこの／くわひろうにて。ほうらく舞なせし時。つゝみは工藤祐つね。どびやうしは畠山／しけ忠なりしとなり御祭礼四月三日。住よし。三輪。あつた。みしま／明神のやしる。かうらのやしる。玉たれ明神といふ。やくし堂神宮寺／と云。しゆるうのめい。正和二年二月と有。石のきさ橋をのほれはひかに／なきの木。西にいてう有。東のかゝみけんほう七年さね朝將軍右大じん／拜賀のため。正月廿七日。御社參神拜ことおはり。夜ゐんにおよひたいしゆつ／し給ふ時。当宮別当くきやう。石のきさはしのきはにうかゝひ来て。劔を取て(第二丁オ)／

かいし奉り所。上の宮。ろう門くわひろう。右の方に。座さますのたん所／天下泰平の御きとう屋夜おたらす有。左の方に。御くうしよあり／御本社。御宝物多し。八月十五日御祭礼

ほうしやうえ同十六日やぶさめ／角力有。同夜ほうへい有。二月と十一月初卯幣從。武内社に六角堂。鶴／龜石。龍神えうかう石。あいせん堂。二位の尼守り本尊の地藏。丸山いなりのやしる当所地主松岡明神是也しらはた明神頼朝をまつる也御神事正月十三日御法事は相承院／にて執行。此寺に頼朝もとりのくわんをん有。鶴か岡むかしは廿五院今／十二院となる。大御くう所。祭神みるめの明神。西のきさはしを下りりう／えい明神実朝をまつる也平安城は花の都鎌倉は柳の都と云。鎌くらやかま倉山に鶴か岡／新宮後とはの柳の都もろこしの里をまつる也院六本杉天狗すむとも云神主大伴山城。少別当大庭榮しやう／外に社家。かく人。八乙女。都合四十余家也。神領永楽八百四十貫もん／余。惣名雪の下。中の一段高き所をおきみち。又は檀かつらともいふ／発句鎌くら夏さへさむし雪の下乙由東西の大路をわかみや小路と云。中の鳥井／ひわ橋。ひわ小路。大鳥居。畠山重保せきたうあり。御本社より浜迄（第二丁ウ）／大門見通し十八丁両方松の並木。浜は小松原由井の浜につゞく也／鶴か岡より東は唐門の跡。すはのやしる山王社。柳原。滝沢。鳥合が原／筋違橋。畠山やしき。大くら。頼朝やしき。治承四年此所へうつりたまひ／日本惣ついふしを給はつて父子三代。平の政子一代授家より二代。親王家／五代合て十一代此所にあつて天下をおさめたまひしがごだご／天皇の御宇。相模入道平の高時ほろびて後。第八の宮をせい位（マ）將軍にすえ奉る又世かわりて。足利高氏の次男左馬頭もと氏／を関東將軍となし給ふ夫よりもと氏の子孫くわんれいとして／鎌倉に在て代々おさめ給ひしと也。法花堂頼朝持仏堂といふ豊後守忠久墓。／頼朝べう。

唐糸のろう西の御門。えがらの天神。にかい堂大らく寺ころみ／不動大山ふとうたゝら場の跡。じゆほう山。かくおん寺平貞時こんりう開山／しんえ和尚薬師堂がやつ薬師十二神尊氏公黒地藏むなたての井。弘法大師／ごまだん跡。わめき十王山の上大塔宮のろう足利たゝよし此所へおしこめ後にうち／奉るりちこう寺願行上人本尊さや阿弥陀大とうのみやのせきとう（第三丁オ）／しゝがんにしゝの形にたる岩也ずいせん寺。もと氏こんりう。開山むそうこく師ほんそん釈迦／へんかい。いらんていの跡。天たい山此辺旧跡多し。歌のはし。文覚やしき。ざせん／川。大御堂。七堂がらんの跡。義朝のため頼朝こんりう釈迦堂大がげが谷。きぬはり山。たんに／ざく石。同井。たくま。ほうこく寺。尊氏祖父家時こんりう。開山ぶつじやう／むかしのかい道橋杭の跡に。杉本観音開山行基ほんとう一はん鎌足やしる／なめり川。青砥左衛門十錢をおとし五十錢にてたいまつをかひ。ひろは／せし所也。なめり川梅翁も百が物あり稻荷山じやうめうし開山たいかう五さん。／藤山いなりやしるくるみがやつ御馬ひやしば。いひもり山。公方やしき泉水川。／稻荷坂十二所。梶原やしき。五大堂。明王院。頼つね將軍きくわん所といふ／塩なめ地藏。かうそく寺。本そんほうやけあみだ。此辺地名旧跡多し／梶原太刀あらひ滝あさひな一ぱい水おなじく切通しとうげ村。はなかげ／地藏。武蔵相模のさかひなり。これより金沢へ出るなり○鶴か岡／より北は馬場町也。大御坊こぶくる坂。青梅の聖天あらひのえんま。／からたせん地藏。巨福山けん長じ開山大かく禪師関東五山平時頼

(第三丁ウ)／

こんりう。金龍水。さんへき也。(マツ)。えうかうの松。不老水。大かく池。杉か谷。／弁財天弘法の神有。まりし天かづまの作第
六天亀か谷切通し。／長寿寺。開山こせん和尚。もと氏こんりう。尊氏の石塔有。亀の井。／矢から地蔵。しやうち寺五山第四也
平のもる時こんりう。かんろ井。山のうち／上杉くわんれいやしき。ぜんこうじ。平時頼こんりう。さいみやうじこせき／明月院開山ふつげんぜんじ。松が岡とうけい寺。びく尼寺也。す
じあしからず／してりえんをねがう女。先かた承引せざれば此寺に入りて弟子となるに／廿四ヶ月を経ればそのことかのふ。
されどみだりにいることをゆるさず。／ずいろく山えんがく寺五山第五也開山仏光禪寺。平時むね建立。仏しやり／三国一にくつ
きのしやりといふ。寺宝多し。大鐘はくろいけしゆくりう／いけ十王堂橋。あふぶな。じやうらくじ。いまいづみふどう女
滝／男滝。市場。はなれ山是より戸塚。ふじ沢の往来なり。／
○鶴が岡よりみなみは金竜山宝戒寺。本尊きやうよみの地藏唐／仏なり。開山五代国師尊氏こんりう。此地北条九代やしき
(第四丁オ)／

く寺。えひす堂橋ひきか谷妙本寺日れん／上人せつほうはじめの寺なり。上人しん筆のまんだらその外。寺宝／多し池のうへ
本門寺の本寺也。ひきのはんぐわんよしすがこせき。じやう／えい寺。大町。へやの井松殿五本ほねの山。ぎをんのやし
る佐竹天皇と云。／米町。さかさ川。炭売場跡。石清水若宮旧跡。
下河原此辺古戦場なり／辻の薬しみだればし。材木座。ふだらく寺頼朝こんりう開山もんがく／平家の赤はたあり。べんが
谷。きやうじが谷。きりか谷。天照山光明寺／たいらのつね時
こんりう開山きしゆ禅師寺宝多し。飯島和歌／江のしま六角井正がく寺。住よし明神。じゆすかけ松。三浦導寸(第四丁
ウ)／
城跡。小つぼの切通し。名越村。田しろくわんおん。坂東札所第三ばんあ
んやうゐん／開山願行上人。花が谷。へびが谷。松葉が谷。妙
法寺日蓮上人御あん／じつの旧跡。大法寺。安国寺日れん上人あ
んこくろん
作り給ふとこ
ろなり石井山長しやう寺こひ／水五名水の
一つなり名こへ切通し。御さ
るはたけ。山王やしろ。法しやう寺岩どのくわん／おん坂東札所
第二ばん
是より三浦郡の内なり。くのやたこへ川。六代御前御さいこ
の／場所。同はか所。軍見山。なきつらが崎。あふずり。もり
戸明神のやしろ。／とびびやくしん。千ぐわん松。頼朝こしか
け姿。高しま。とつとのしま。名しま／此浦より。大島伊豆。
箱根。大山。富士。眼前に眺望筆にのべがたし。／このしまに
左りまきのさぶゐあり。その外此辺名地多し○鶴が岡より／西
は岩屋堂くるがねの井。しん清水。鉄観音。鶯が谷。志一上人
の石／塔。同いなりのやしろ。松原寺本尊日金地蔵。頼朝伊豆

の日金を／此処にうつしたまふ。岩屋ふどう。是より扇が谷なり。花光ゐん。／上杉くわんれいやしききこく山寿福寺五さん第三也平政子こんりう開山／千光こくし。本尊かこしやかといふ。絵かき矢倉。実朝せきたう(第五丁オ)／

此所源氏代々屋敷跡なりと云。東光山えいしやう寺太田道くわん旧跡也／水戸源朝臣頼房卿寛永十一年御こんりう源氏山御は山今にはた竿／の跡あり泉か谷。いづみの井。せんこく山浄光明寺平長時こんりう／本尊ほうぐわんのみだ。八坂のふどう矢ひ

ろひ地藏。あみ引地藏藤が／谷。ためすけ卿石塔扇の井海蔵寺開山げんをう禪師那須野のせつしやうせきをうちくたき本尊なきやくし。そこぬけの井。十六の井。かげきよつちの／ろう。梅が谷つゞきの

里。けはい坂。くづはらが岡。六本松是よりかちはらむら／かつが橋。今小路。正宗やしき。同いなるの社。たつみのくわう神。人丸塚かけきよ／尊氏やしき。さいきやう橋。佐介が谷。同いなる社。かくれ里福神／錢あらひ水。天狗堂。七観音が谷。けか

ちはたけ。佐々目が谷。藤九郎／もり長やしき。あまなわ明神八まん太郎のうぶすな。盛久首の座／の跡。長谷町同くわん音御文武丈六尺やとや。光そくじ日らう上人土の／ろう。高德院本尊大仏。みこしがたけ。大ふつ。切通し此道藤沢へ(第五丁ウ)／

往くわん也。坂の下村御れうの宮鎌くらの権五郎星月の井。こくうざう堂。極らく寺／切通し月影か谷阿仏尼。やしきの跡弁慶腰掛松。ごく楽寺。開山にんしやう／平重時こんりうせんふく

茶うす其外宝物多し。針すり橋。日れん上人／けさかけ松上人の塚。ちんかね山。追あげ。袖ヶ浦。いなむらが崎。れうせんが崎／元弘三年五月廿一日の夜。新田義貞。二万余騎を卒して。此所へ望みみるに。北は／切通し迄山高く道けはしきに。木戸をかまへ。かいだてをつゐて数万の軍兵／陳(チン)を守り。並居ける。南は稲村れうせんが崎にて。さと道せまきに波うち／ぎはまてさかも木引かけ。沖四五丁をへだて兵船なみゐる矢ぐらをかけて／其ていけんごに見得ければ。義貞馬より下り給ひ甲をぬいで龍神へきねんし／こかねづくりの太刀をぬいてなけいれ給ふに。ふしぎなるかな。たちまち廿余／丁がほどひかたとなりて軍勢我先にと真一文字にかけ通り。つゐに／鎌倉へせめいりしとぞ略文上人雨ごいありし所也。音なしの滝。金洗沢。／武者がくれが谷。横手が原七里が浜。六丁巷里にて行合川するがの次郎か／笈おひやき松。たもとが浦。こゆるぎの松。八王子の宮。腰越万福寺弁けいじひつの(第六丁オ)／

硯が池。片瀬川。龍口寺。日蓮上人西行法師見かへりの松。とがみがはら。八姿／が原もろこしが原名におはぶ虎や住べきあつありといふ名ももろこしがまぢに江の島雪の下の行者／の開くと云。金龍山と号す。岩本院下の坊。上の坊。弁財天。御本社三社／あり。奥の院は岩屋なり。祭礼四月初巳の日かま石。福石。碑石。もちこしより来る山二つ／あり児が淵。まな板石。龍池。其外名所多し○武州金沢雪の下より二り六つうら／侍徒川油提川。専光寺照手の姫の観音あり三艘が浦。瀬が崎。／のり頼公の塚飛石。金龍院にあり。三本杉。瀬戸明神。蛇木福石。弁天社／照手の姫いぶし松。瀬戸二

つ橋。洲寄。町屋。称名寺。平あき時こんりう。／開山寂海和尚。美女石。姥石。四石青葉もみぢ。文殊桜。昔賢象さくら／黒梅。せいご梅。桜梅等八木のうち也かまりや。君が崎一口松。てこ明神。能見堂。筆捨姿。／夫婦松此所せつ。〔金沢八景〕洲崎晴嵐。平方落鴉。野嶋夕照。／内川暮雪。乙柄帰帆。小泉夜雨。瀬戸秋月。称名寺晚鐘。／板元 鎌倉岩屋堂前表具屋「梶田」

(規・沢・白)(図版八)

(一) 寛政新改正鎌倉名所記 寛政刊 英富 半 六丁
印面高さ一九・四糎。每半葉十四行。

右表具屋版(一)と比較すると、当書には江の島・金沢八景がないが、本文はほとんど同一である。異なる所は当書では静法楽の舞の項にて「よしの山みねのしら雪ふみわけて入にし人のあとぞこひしき」が、大仏の項にて「名月に南を得たり仏頂瓊」が加わる如く、新たに挿入された和歌・俳句があったり、若干の仮名書き漢字書きの差がある程度である。最末葉には、(一)にあった江の島・金沢八景の項が失くなり、「雪の下八幡宮より所々道法」が記される。こうした構成は当書だけで、次掲文化版(三)以降の諸版では、(一)と同じく本文末にこの二項が付載される。刊記は道法に続いて記され、「版元 屏山下 英富」。丁付はのどに丁数のみ刻される。表紙は今迄の諸版とは異なり、新しい図柄に変わる。すなわち、右上段には内容見出し、右下段には浜の大鳥居の下に四羽の鶴がおり、その右方の小さい雲形の中に右大臣の和歌が記され、左方には四周双辺の野をもつ書名が記

される。この図柄は明治期に致る迄、書名上段の年号の角書きのみを変え、ほとんど各版に踏襲された。版元の住所は「屏山下」(屏風山下)と記されるので、後述大坂屋孫兵衛・常陸屋伊三郎・家根屋四郎右衛門同様に宝戒寺門前に居住していたのであろう。当書の他に英富の名の記された名所記及び鎌倉絵図の所在を聞かない。(沢・明・規)(図版九)

(三) 文化新改正鎌倉名所記 文化刊 大坂屋孫兵衛 半 六丁
印面高さ一八・七糎。每半葉十五行。

当書より後掲書(三)迄の四版は、表紙・本文共にかぶせ彫り関係ある別版である。従って本文の行款も同一で、刊記さえ四者は同一である。この四版の前後関係は明白ではない。しかしながら、表紙は各版共に寛政版(一)と同一図柄であるものゝ、当書のみを表紙の野の右端に「御免雀ヶ岡名所記不許翻刻」という刻記があるので、大坂屋文化版四種の内、最も古いものかと思われる。大坂屋では私の調査したものだけでも、この刻記ある「鎌倉絵図」二版(この内一版は沢氏前掲書第十四図)と同一図柄であるものの、この刻記のないものを一版を刊行している。この三版は各々かぶせ彫り関係があり、安永八年以前の図柄(沢氏前掲書による図柄年代)である。いずれにも刊行年記がない。この三版は当書以下四版(三)と(四)と一緒に販売されていたように思われる。大坂屋では、より古い版式の絵図(沢氏前掲書第十一図)をも刊行しているが、右の御免刻記はない。沢氏前掲書に於ける図柄と年代の組合せには興味もたれる。

しかし、図柄年代と実際の刊行年代との関係について、再度調査する必要がある。例えば安永八年に修造された島津忠久墓が当名所記に記載されるのは二十年近く経過したと考えられる前掲表具屋版(四)が最初で、文政六年に修造された大江広元墓及び毛利季光墓が記載されるのは三十年程経過した安政二之宮版(三)が最初である。右の覆刻関係ある「鎌倉絵図」三版は文化頃、或いは以降に刊行されたものではないだろうか。当書は表具屋版(三)同様に、巻末に江の島及び金沢八景が付記される。以降の諸版又同様である。丁付はのどに丁数のみ刻される。巻末刊記は「板元 鎌倉 大坂屋 孫兵衛」。版元の大坂屋について、後裔である現当主の島田久吉氏(孫八の孫に当られる)は「大坂屋は明暦の振袖火事以後、江戸より鎌倉にきた家で、回遭問屋を営み、孫兵衛の次の代が明治に鎌倉絵図(明治期の図柄)や名所記(安政版の版木を使用した修印)を出版した孫八である。」といわれた。(沢・早)(図版一〇)

(三) 文化 改正 鎌倉名所記 文化刊 大坂屋孫兵衛 半 六丁
新版 印面高さ一八・五糎。每半葉十四行。

当書以下三版は表紙右端の「御免雀ヶ岡名所記不許翻刻」の刻記がないだけで、前掲書(三)とは表紙・本文共に覆刻関係ある別版である。刊記又、同一である。この四版の中でも、当書と次掲書(四)とは極似しているのも、より密接な関係があるのかもしれない。(神・規・蜂・国)(図版一一)

(四) 文化 改正 鎌倉名所記 文化刊 大坂屋孫兵衛 半 六丁
新版 印面高さ一八・四糎。每半葉十四行。
前掲書とはかぶせ彫り関係ある別版である。刊記又、同一である。(国・金)

(五) 文化 改正 鎌倉名所記 文化刊 大坂屋孫兵衛 半 六丁
新版 印面高さ一八・四糎。每半葉十四行。

前掲三版とはかぶせ彫り関係ある別版である。当書の後印本の版元は常陸屋伊三郎に換る。

(1) (早印) 大坂屋孫兵衛

(三) (四)と同一刊記を有する。(規)(図版一二)

(2) (後印) 常陸屋伊三郎

版木が常陸屋に移動したので、刊記のみをうめ木にて訂正する。新しい刊記は「板元 鎌倉 常陸屋 大藏町 伊三郎」。(沢・静)

この常陸屋伊三郎は大坂屋と同姓島田氏で、大坂屋とは親戚筋に当り、同じく宝戒寺門前に住していた。私の知る限り、島田伊三郎或いは常陸屋伊三郎の名で鎌倉絵図五版(縦図は無年記のもの四版、横図は嘉永三年版一版)を刊行している。縦図四版の内、二版は安永八年以前の図柄(その内一版は沢氏前掲書第十五図)で、残る二版は若干時代が降る図柄(その内一版は沢氏前掲書第十六図)である。恐らく当名所記はこれらの絵図のいずれかと一諸に販売されていたのであろう。常陸屋では当書以後、嘉永版(四)安政版(三)の名所記二版を刊行している。

(丙) ^{文政}改正鎌倉名所記 文政刊 小林弥三郎 大 六丁
印面 ^{新版}高さ一九・一糎。每半葉十四行。

本文は前掲表具屋版(乙)の覆刻である。本文の行款・字様は全く同一である。表紙は同書とは全く異なり、寛政版(一)文化版(三)と類似するが、右大臣の和歌が記された雲形が鳥居と鶴の上に移り、四羽いた鶴の内、飛んでいた一羽が減り、新たに松が描れている。卷末刊記は「板元 小林弥三郎 ^懐春」。私の調査した国学院大学図書館所蔵本は明治以降の後印本(料紙は美濃判)で、後述文政版(丙)を合綴している。版元の小林弥三郎は文政以降の図柄をもつ絵図(沢氏前掲書第二十八図)をも刊行している。同図の刊記には住所も記され、「鶴岡表御門前雪之下 小林弥三郎」。恐らく当書とは一組になるべくものである。

(乙) ^{文政}改正鎌倉名所記 文政刊 家根屋四郎右衛門 半 六丁
印面 ^{新版}高さ一八・三糎。每半葉十四行。

当書は文化版四版(乙)と内容がほとんど同じであるが、若干所収の和歌に異動がみられる。例えば、八幡宮の項にて当書では梅翁及び素外の句が省略され、文化版では「豊後守忠久墓」と記されていた所が、当書では「嶋津豊後守忠久墓」に改められる。表紙は文化版四版と同一図柄で書名上段の角書きの年号のみ異っている。丁付は各葉のどの□内に、丁数が記される。卷末刊記は「相州鎌倉大蔵町 家根屋四郎右衛門板元」。

家根屋は私の知る所、文政六年以降の図柄をもつ縦図二版(一)版は沢氏前掲書第二五図)と横図一版を刊行している。両版

共、刊記は前述御免鶴ヶ岡の刻記(乙)にて述べる)の下に記され、「鎌倉雪之下宝戒寺前 家根屋四郎右衛門板」。大坂屋・常陸屋・英富同様に、宝戒寺門前に住していたことがわかる。四郎右衛門の名は「宝戒寺境内領地図(『鎌倉の古絵図―鎌倉国宝館図録十七集―』第三集所収)」に見られる。その四郎右衛門と家根屋が同一人か否かは今のところわからない。(規)

(丙) ^{文政}改正鎌倉名所記 文政刊 丸屋富蔵 半 六丁
印面 ^{新版}高さ一八・五糎。每半葉十四行。

前掲家根屋版(乙)とは本文・表紙共に覆刻関係ある別版である。従って内容は同一である。両者共に刊行年の記載は外題に同一の年号があるだけなので、前後関係はわからない。卷末に陰刻の刊記があり、「八まん宮表門前丸屋富蔵」。この丸屋は八幡宮裏門前にて旅館を営み、文政六年以前の図柄のものと以降の図柄のものとの二種の「鎌倉絵図(沢氏前掲書第十八図・二十七図)」を刊行している。前者は図上の南北の軸が前述の大坂屋や常陸屋版(より古い図柄の方)と同一であり、後者は前述家根屋版と同一軸で、江戸末期の図柄を示している。当書の版元である丸屋は家根屋より古い図柄の絵図を刊行しているところからみて、或いは当書の方が前掲書より先行するのかもしれない。国学院大学図書館所蔵本は首二葉を欠く明治以降の後印本である。(規・沢・院・白)(図版一三)

(丙) ^{嘉永}改正鎌倉名所記 嘉永刊 常陸屋伊三郎 半 七丁(絵入本)
^{新版}

印面高さ一八・七糎。每半葉十四行。

「鎌倉名所記」にて最初の絵入本である。本文は和歌・俳句に若干の異動がみられるものの、文化版・文政版とほとんど同じである。挿図は「鶴ヶ岡社内之図」「頼朝公屋鋪跡」「建長寺之図」「長谷観音図」の四図でいずれも絵地図とも見える簡略な鳥瞰図である。表紙は寛政版(二)より踏襲されてきた鳥居と鶴の図柄とは異なり、新たに八幡宮社前に男女二人の旅人がいる図柄に変わっている。版心に丁数のみ刻す。巻末刊記は「板元 鎌倉宝戒寺前 常陸屋 伊三郎」。版元の常陸屋は嘉永三年に横図「鎌倉絵図」を刊行している。当書はこの絵図や前述の縦図(四参照)のいずれかと共に販売されていたのであろう。いわゆる常陸屋文化版「鎌倉名所記」(五)は大坂屋から版木を譲り受けたもので、当書は常陸屋が始めて刊行した名所記であらう。

(沢一・規・沢二・神・白) (図版一四)

(三) 安政改正新版 鎌倉名所記 安政刊 二之宮 半 九丁

四周単辺(一八・四×一三・二糎)。每半葉十二行。

当書の表紙には文政版と同様に五羽の鶴がいるが、右上段の内容見出しに若干の異りがある。丁付は版心に丁数のみ刻す。本文は表具屋(三)より始まる第三種本をもとにして、増訂を加えている。大きく異なる所を左に列挙すると

(1) 八幡宮を松ヶ岡に勧請した項・静の舞の項にて、新たに加えられた和歌がある。

(2) 神主・小別当について、「大伴氏」「大庭氏」と姓のみを記

すようになる。

(3) 西御門に島津屋敷が記される。

(4) 文政六年に毛利家によって修復された大蔵の大江広元墓と雪之下鶯谷毛利季光墓が記される。

(5) 荏柄天神社の項にて正宗刀の所蔵と「えから平太屋敷跡」が記される。

(6) 杉本寺の次に「鎌足社、うらを大いなば越といふむかし大江家の路次と云」が加わる。

(7) こふくる坂切通しにて「此処新田よし貞合戦の時堀口美濃守さしむかふと云」が記される。

(8) 妙りう寺と大行寺の間に、「日れんこしかけ石」が記される。

(9) 富田屋版(三)同様に辰巳荒神の前に運慶仏師屋敷が記される。

(10) 金沢称名寺の項にて、初めて「金沢文庫の旧跡」が記される。

当書の本文末葉裏には「十井」「十橋」「五名水」が記され、末に刊記があり、「鎌倉雪之下住二之宮蔵板」。版元の二之宮では文政六年以降の図柄をもつ絵図(沢氏前掲書第二十六図)をも刊行している。この絵図も名所記と同じ頃に刊行されたものであろうか。(沢一・規・沢二・沢三・金・前・鎌・神・白)

(図版一五)

(三) 安政改正新版 鎌倉名所記 安藤広重画 (安政四(一八五七)刊 常陸屋伊三郎 半 八丁(絵入本))

四周単辺（一八×一二・六糎）。每半葉十四行。

嘉永版(元)に続く常陸屋版名所記である。本文はほとんど同書を踏襲している。挿画は嘉永版の簡略な絵とは異なり、初代広重

(一)安政五没)による風景画である。各画には「広重立」或いは「立」と落款のある「鶴ヶ岡社内之図」「自八幡社頭雪之下

檀桂遠望之図」「頼朝法華堂(仮題)」「建長寺之図」「自長谷寺山上鎌倉在家由比浜光明寺三浦海岸眺望之図」「稲邑ヶ崎七里

ヶ浜」の六図が描かれる。この内「鶴ヶ岡社内之図」「稲邑ヶ崎七里ヶ浜」の両図は「広重名所旅絵日記」(嘉永中稿カ)所収

図と同一構図であるのは興味深い。当書の版木は明治期には蔵版者であった大坂屋孫八氏(孫兵衛息)の孫に当られる島田久

吉氏が袋の版木をも合せ、全七枚全てを所蔵しておられる。その内、第一丁・第四丁・第六丁を刻す版木裏には墨筆にて各々

「刻木師／江戸御かげ所／宮下次良兵衛方／壱番、／段かつら島居前／はす／安政四年／巳四月吉祥日」「四番／安政四年巳／

五月吉日板」安政巳五月吉日／改刻／宮下次良兵衛／六番目」と記される。これによって当書が安政四年に刊行されたことがわかる。丁付は版心に丁数のみ刻す。この版木には明治期の削除と

うめ木による修補が数箇所なされている(詳細は(2)にて述べる)。前述(国参照)の縦図の内、少くとも一版は当書と共に

販売されていたのであろうか。

(1)「江戸期」印 常陸屋伊三郎 半

私の調査した二書は、いずれも表紙の下段が空白である。或いは二書共に、その部分を削除した修印本であるのかもしれない

い。金沢文庫所蔵本は袋をも存する。長沢氏所蔵の袋(本体はない)も当書のものである。巻末刊記は「版元 鎌倉宝戒寺前常陸屋伊三郎」。 (金・前)

(2)「明治初期(三・四年カ)」修印 大坂屋孫八 半

右常陸屋版の版木が大坂屋に移動した後修本。すなわち明治以後、神仏分離によって八幡宮から仏教関係の建物は失くなり、

東光寺跡に新たに鎌倉宮が建立(明治二年)される等、鎌倉の名所にも変化が起きた。当書は右の版木を使用して、そうした

所をうめ木にて修補したり、削除したり、刊記部分の版元のみを「大坂屋孫八」に修正する等、時代に合せて修印されたものである。恐らく明治三・四年頃の修印かと思われる。表紙の道

法には、東京や横浜への里程が記されるが、版木を見ると、その道法の部分のみ新しく作られたことがわかる。以上の訂正箇所は八幡宮境内と鎌倉宮付近のみに見られるので、表紙ウより

第四丁迄の全文(底本は(2))を左に翻字する。

。「」内は明治初期に版木を削除した為、空白となっている所で、もとの形である(1)を使用して補記した。

。傍線の左行は、明治初期にうめ木により訂正した箇所、以下の()内にはもとの形である(1)を使用して補記した。

「相州鎌倉さつしゅうと申すらんじやうは天智天皇八年大しよくわん鎌足藤原の姓をたまはりて／内大臣に任ず。このしゆくぐわん成たるによつて、鹿島さんけいありて下向の時。此由井の郷にし

ゆ／くし給ひける夜。靈夢の事有て多年たしなみ給ふ鎌を。大蔵山松が岡にうづみ給ふ／是より鎌倉の郡と申なり鎌をうづめ

給ふ所は今の八幡宮の御本社^の処なり。かゝる／地なるによつて。大しよくわんの玄孫染屋太郎時忠も居住し給ふこれ。養老神龜ノの頃なり。其後ちんじゆふ將軍（つとむ）権（つとむ）いよの守頼義。康平五年奥州あべの貞任をせい／ばつ有て。同六年さがみの守にんずよつて同八月山城石清水若宮を此由井の鶴ノ岡にくわんじやうし給ふ扱將軍さだもりの孫。上総介なをかたの娘をめとり。八幡太郎よし／いへをまふくよし家せい長ありて。むつのかみ東夷將軍ににんじ。かまくらに居住し給ふ。／夫より年へて治承四年右大将頼朝。由井の鶴が岡若宮を。今の宮地にうつし／給ひてより鶴が岡と申也。八幡宮の御本社^の地其頃松岡明神とて。いなりのやしる有し／を。けん久二年頼朝地主いなりを。同西の丸山にうつし。此八まん宮をくわんじやうし／給ふ（石清水のみをかくる人はみな何代か玉まくすはの久しく世にも住とこそきけ頼朝つるかおか梅翁）八幡宮の鳥居を入れて。石のそり橋を／あか橋といふ。左右はす池嶋七つあり。右の嶋の内弁天の社あり。二王門跡鳥居有（むかしは八つ足）（以上表紙裏）／「門といふ」。左右の小路鳥居ありやぶさめばと云。まひ殿神楽堂と云。左のかた／「こま堂。本尊五大明王りん蔵」。天照大神社。松堂。源太夫。天神えびす社右の方「だい／塔に本尊五智如来」。若宮大権現。東鑑に文治二年源義経の妾。しづかの前くわひ／ろうにて。ほうらくの舞なせし時。鼓は工藤すけつね。どびやうしは畠山しげ忠なりしとぞ。／しつかがよめる（よし野山みねのしら雪ふみわけて入にし人のあとぞ恋しき）御祭礼四月三日住吉。三輪。あつた。三島明ノ神社。かうらの社玉だれ明神と云。やくし堂神宮寺といふ。しゆるうのめい。正和二年二月と

あり。／石のきざ橋をのぼれば東になきの木。西にいてうあり。東鑑けんほう七年さねとも將軍右ノ大臣拜がのため正月廿七日御社参。神拜事おはり。夜ゐんにおよびたいしゆつし給ふ時。／当宮別当ぐぎやう。石のきざ橋のきはにかゞひ来て釵をとつてがいし奉りし処。上の宮。ろう／門。くわいらう右の方に。坐さまずのたん所天下安全の御きたう昼夜おこたらず有。左の方ノ御くう所あり御本社御宝物多し八月十五日御祭礼ほうじやうえ同十六日やぶさめ／角力同夜ほうへい有二月と十一月初卯幣（へい）從（じ）。武内社。六角堂鶴亀石りう神えう／かう石。あいぜん堂二位の尼守り本尊の地蔵。丸山のいなりのやしる（当所明神是也）しらはた／明神（頼朝をまつる）御神事正月十三日箱崎氏（御法事は相承院）にて執行此院に頼朝もどりの（以上第二下裏）／観音あり。鶴が岡。むかしは廿五院今は十二院となる。大御ぐう所祭神みるめの明神。西の／きざ橋を下り。りうえい明神（実朝をまつる）。平安城は花の都。鎌倉は柳の都と云（鎌倉やかまくら山につるが／この里右大將）新宮（後とばの院をまつる）六本杉天狗すむともいふ。「神主大伴山城小別当大庭えい／しやう」外に社家。かく人。八乙女（おとめ）都合四十余家なり。「神領永楽八百四十貫余」。惣名雪の下／中の一段高き所をおき道。又段かづらともいふ（鎌倉を生て出けん鎌倉は夏さ初かつをはせを雪の下へ寒し）東西の大路を／若宮小路といふ。中の鳥居びは橋びわ小路。大鳥居畠山しげやすの石塔あり御本社より／浜迄大門見通し十八町。両方松の並木。浜は小松原由井の浜につゞくなり／○鶴岡より東は唐門の跡。すはの社。山王社。柳原。滝沢。鳥合が原。筋違橋。畠山やしき。／大倉頼朝やしき。治承四年此

所へうつり給ひ日本惣ついふしを給はつて父子三代。平政子／一代。摂家より二代。親王家五代合せて十一代此所に在つて天下を納給ひしが後醍醐天皇の御／宇。さがみ入道平の高時ほろびて後。第八の宮を征夷將軍にすえ奉らる。又世かはりて。／足利尊氏の二男左馬頭もと氏を関東將軍となし給ふ。夫よりもと氏の子孫くわん／れいと鎌倉に在て代々おさめ給ひしとなり。法華堂頼朝持仏堂と云。豊後守忠久墓頼朝／廟唐いとのろう西みかど。東御門えがらの天神。二階堂。大らく寺こころみ不動。大山不動(以上第三丁裏)／たゝら場の跡。しゆほう山かくおん寺。平定時こん立開山しんえ和尚。やくし堂か谷薬師十二神尊氏棟礼うんけい作。黒地藏。むな立井弘法大師ごまだんの跡十王山の上／鎌倉宮(大塔宮)。「のろう。足利忠よし此所へ／おしこめ後にうち奉る」。りちかう寺開山願行上人本尊さやあみだ。大塔宮のせきたう。しゝがん／しゝのなりにたる岩也。ずいせん寺もと氏こんりう。開山むさう国師。本尊しやか。へんかいいらんていの跡／天だいな山此辺旧跡多し。歌の橋。もんがくやしき。ざぜん川大御堂七堂からの跡よしとものため頼朝こんりうと云。／しやか堂。犬かけが谷。衣はり山。たんさく石。同井。たくま。ほうこく寺。尊氏祖父家時こんりう／開山ぶつじやう／むかしのかいだう橋杭の跡。杉本観音開山行基ほんどう一番ふだしよ也。鎌足社なめり川。／青砥左衛門十銭をおとし五十銭にてたい松を買いひろはせし処なり。／釜火も百かもあり。稻荷山。じやう／めう寺開山たいかう五山第五也。藤山稻荷社くるみが谷。御馬ひやし場。いひもり山。公方屋敷。泉水川。いな／り坂十二所。かぢはらやしき。五大堂明王院。頼つね將軍

祈願所といふ塩なめ地藏。かうぞく寺／本尊ほうやけあみだ此辺地名旧跡多し。梶原太刀あらひの滝。あさひな一はい水。同切通した／うげむらはなかけ地藏。武さしさがみのさかひなりこれより金沢へ出るなり／○つるが岡より北は馬場町。大御坊。こふくろ坂。青梅のしやう天。あらゐのえん／ま。からだせん地藏巨福山建長寺開山大かく禅師関東五山第一なり平時頼こんりう。金龍水(以上第四丁ウ)。 (規一・規二・金・神・沢一・沢二) (図版一六)

(3)「明治初期(三・四年カ)修「昭和」印 島田久吉氏蔵板半

鎌倉西御門来迎寺が、右の版木を借用して、終戦後、摺印して諸々に配布した。版木は(1)と同一で、明治初期に修補を加えたま々であるが、表紙の道法部分が空白である。現在その版木の内、道法部分ははずされて空間になっている。後の覆表紙見返しには奥付があり、「鎌倉名所記／版木所有鎌倉市小町四三三島田久吉／印刷横浜市西区岡野町十一友信堂／頒布鎌倉市西御門三四如意輪観世音来迎寺」(この行は「頒布」のみ印刷。他は墨筆。) (規・沢)

(三)明治鎌倉名所記 明治二(一八六九)刊 二之宮 半 八丁改正 四周单边(一七・八×一二・七輝)。毎半葉十二行。

二之宮による安政版(三)に次ぐ刊本である。当書は同書をもとにして作られているが、鶴岡八幡宮に於ては「仁王門」を「表門」に、「十二院」を「総神主」に、「小別当」を「大祓宜」に改め、護摩堂・輪蔵・大塔・神宮寺・鐘楼がなくなっており、二

階堂付近では大塔宮土のろうと理智光寺の間に「今年大塔宮の御社御造宮あらせられる」が挿入されている。その他、本文のほとんどは安政版(三)をそのまま踏襲している。版心は「鎌倉名所(丁数)」。巻末には「鎌くら十井」「おなしく十橋」「同五名水」「雪の下より諸方道法」が記され、次いで刊記があり、「明治二記」年発行 鎌倉住 二之宮蔵板。表紙の図柄は安政版(三)と同一である。(金一・金二)

(三) 江の嶋 鎌倉名所記 明治六刊
金 沢

(1) 明治六(一八七三)刊 戸川 半 八丁

書名の角書きに「江の嶋」「金沢」が記されるが、本文は前掲二之宮版(三)のかぶせ彫りによる再刻である。行款・字様共に同一である。前掲書と異なる点は江の島の項にて、もと／＼の標目の前に、「江の嶋」という新たな標目を立て縁起四行が挿入されるのみである。版心は「鎌倉名所(丁数)」。巻末刊記は「明治六年発行 鎌倉住 戸川蔵版」。(規・金一・金二・神・沢)

(2) 「明治六」刊 明治二十三(一八九〇)修印 吉田治右衛門 半 八丁

右本(1)の版木に修正を加え、十七年後に印刷したものである。訂正箇所を左記に列記すると、

。八幡宮境内の項は新たな版に換え、撰社・末社・十二坊・年中行事を省略したので、(1)では一丁半程(首葉及び第二葉オ)あったものが、当書ではほぼ一丁に縮小された。よって

当書の丁数は(1)と合せる為に、初丁の丁付を「二」としていい。最終丁たる第八丁は新たな版に換えている。その内オは(1)の覆刻であるが、ウはかなり異なる。

左記は部分的な補刻(うめ木)による修補箇所である。補刻は版木の痛みによるものではなく、主として各名所に於ける変更を意味するものと思われる。()内にはもとの姿(1)を記した。

。第三丁才第四行

「より由井浜迄十八丁中の鳥居西方明治廿二年七月十六日横須賀迄
かよりステンションアリ」(より浜迄宮門見通十八町由比の浜なり)
鉄道

。第三丁ウ第六と七行 鎌倉宮の項

「明治二年御やしる御草創あり／宮幣中社鎌倉宮と御宣下八月吉日
御勸祭 理智光寺開山願行上人本尊さやあみだ」(今年大塔宮の／御社御造宮あらせらるりちから寺開山願行上人本尊さやあみだ)

。第四丁才第十一と二行 建長寺の項

「こ建りう陣かね橋の陣
に用ひしといふ 富士のまきがり 御饗厳帝 金龍水さんへき池え
向松不老水大覚池」(こんりう。くすの／きのぢん太鼓、金龍水、さんへき池、えうかうの松、不老水、大かく池)

。第四丁ウ第五と七行 東慶寺の項

「開山覚山志道和尚秋田城介よし景女
北条とき宗むろ／第五世用堂大和尚後醍醐天皇の姫宮応永三年八月八日寂第十七世旭山／和尚八正院源
よし明女第二十世天秀和尚豊臣秀頼のむすめ也」(すじあしからずしてりえんを／願ふ女せん方承引せざれば此寺に入弟子となるに

二十四ヶ月をへれば／事かなふされどもみだりに入る事をゆるさず)

。第六丁才第九行 寿福寺の項

「唐艸窟実朝公政子墓正二位俊光公墓此所」(絵書岩屋。さねとも公石塔。此所)

。第六丁ウ 第五、七行 源氏山付近

「けはひ坂／鏡立松葛はら岡葛原岡神社は贈従三位日野氏俊基卿祭神同卿の墳墓／南は勝か橋正宗やしき仏師運慶やしき巽神社さいきよはし」(けはひ／坂、是より梶はら村、藤沢宿へ出る、南はかつか橋、今小路、正むね／屋しき、同いなりの社、運慶仏師やしきさいきよはし)

。第七丁才第一行 大仏の項

「五丈」(三丈五尺)

卷末(第八丁ウ)に刊記があり、

「明治廿三年一月二十日印刷 神奈川県鎌倉郡東鎌倉村／同 年同月廿二日
出版 発行者 吉田治右エ門 雪ノ下二百八十番地平民
印刷者 同 人」 (規)

当版を最後に、江戸中期より次々と継続して刊行された「鎌倉名所記」の続行は終わった。かわって、相良国太郎編「鎌倉江島名所案内(明治十五刊)」「鎌倉案内(明治二十一刊)」や法木徳兵衛編「江ノ島鎌倉名所巡覧(明治十六刊)」のような明治の時代に即した案内記が主流になっていった。

(追記)

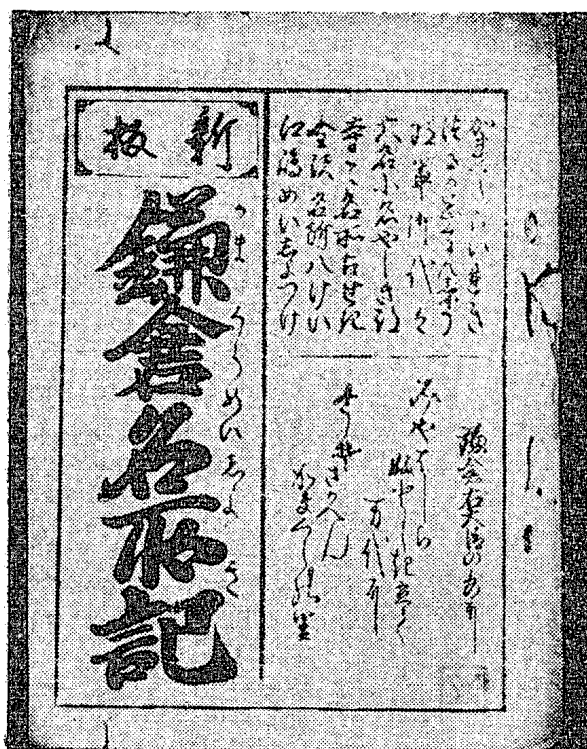
拙稿をまとめるに当り、貴重な資料を長期間貸出して下さった長沢規矩也氏・沢寿郎氏・前田元重氏を始め、各所蔵者の皆様には非常にお世話になった。こゝに謝意を表したい。



2. 富田屋庄左衛門版 (2)
長沢規矩也氏所蔵



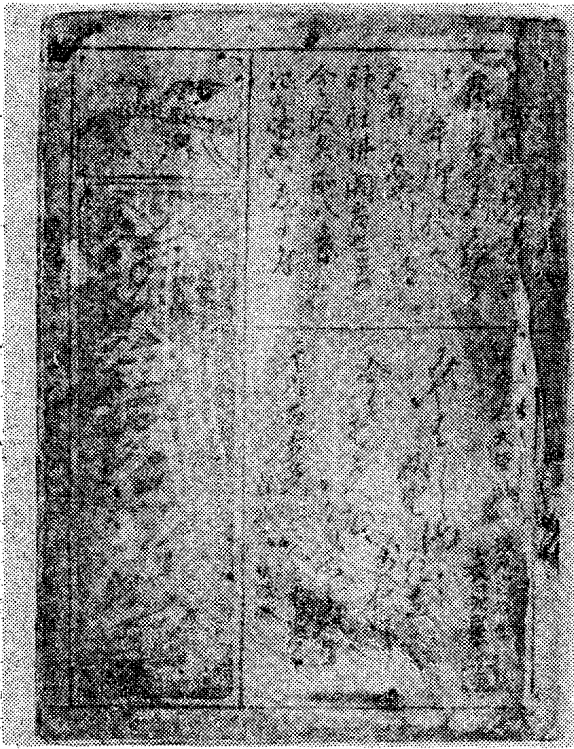
1. 正徳3年版 (解題番号1)
東京都立中央図書館所蔵



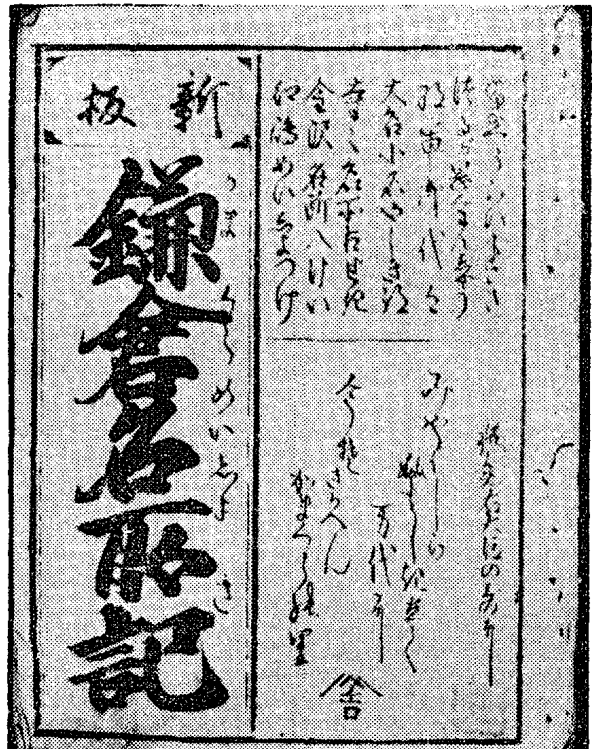
4. 無刊記 (4) 長沢規矩也氏所蔵



3. 富田屋庄左衛門版 別版 (3)
長沢規矩也氏所蔵



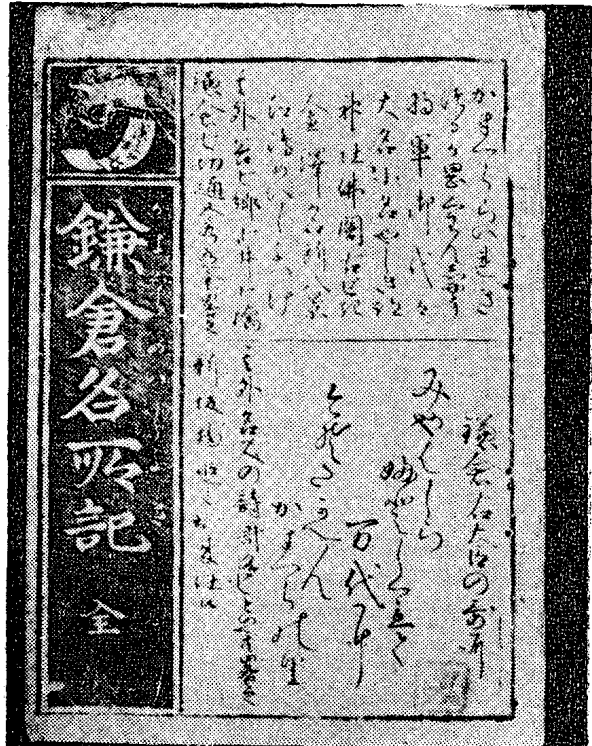
6. 寛政3年刊表具屋版(8)
前田元重氏所蔵



5. 簗版(6)長沢規矩也氏所蔵



8. 表具屋版 別版(10)
長沢規矩也氏所蔵



7. 寛政7年版(9)
長沢規矩也氏所蔵



10. 文化刊 大坂屋孫兵衛版 (12)
沢寿郎氏所蔵



9. 寛政刊 英富版 (11)
長沢規矩也氏所蔵



12. 文化刊 大坂屋孫兵衛版 別版
(15) 長沢規矩也氏所蔵



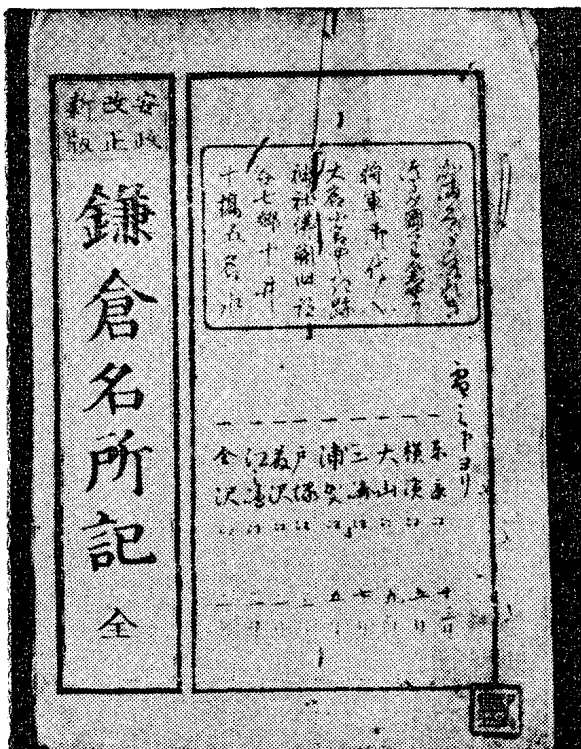
11. 文化刊 大坂屋孫兵衛版 別版
(13) 長沢規矩也氏所蔵



14. 嘉永刊 常陸屋伊三郎版 (19)
長沢規矩也氏所蔵



13. 文政刊 丸屋富蔵版 (18)
長沢規矩也氏所蔵



16. 安政刊明治修 大坂屋孫八版
(21-2) 長沢規矩也氏所蔵



15. 安政刊 二之宮版 (20)
長沢規矩也氏所蔵